

【中編完結版】大切な人を庇って死ぬのが夢なのに世界がそれを許  
してくれない件について

サークル出雲

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

昔助けてくれた少女に感謝して恋愛感情通り越してこいつのために死にたいと思ってしまったゲロ重なアホの話です。

夢は彼女のために死ぬ

基本すれ違い通信恋愛モノ

庇われてもつと好きになってゲロ重になってく系ヒロイン大好き

○

ファイナルディスティネーションの映画シリーズを意識して書いてありますので注意。

9／9 : 主人公とヒロインの名前を追加。詳細は活動報告参照

9／21 完結。描写不足もあり、最終話を少し追記しました。

9／22 後書き追加

リメイク版の更新始めました

<https://syosetu.org/novel/3406>

23／

## 目次

1、大切な人を庇って死ぬのが夢なのに世界がそれを許してくれない件について	1
2、彼女の気持ち	6
3、光を得た日	9
4、逃げ道なしのピタゴラススイッチ1v1	14
5、なんだかんだで慣れてきた	19
6、いろいろやばくなってきた今日この頃	22
7、きつと心は通じ合っている	26
8、天啓得てして、思考は止まる	29
9、恋する乙女は怖い	33
10、その命の使い方	38
Ex 1、在りし日の恩返し①	43
11、油断ダメ絶対	48
12、知らないものは理解できない	53
Ex 2、在りし日の恩返し②	59
13、命の価値観	63
14、死んだら絶対に許さない	67
Ex 3、在りし日の恩返し③	73
最終話、それで終わり	77
この作品について（後書き）	80
【お知らせ】改訂版連載始めました。	82

1、大切な人を庇って死ぬのが夢なのに世界がそれを許してくれない件について

俺には大切な人がいる。

それは何者も追い越せないほどに大きく、人生そのものと言っているほどにかけがえのないものだ。

両親と彼女をどちらかの命を選べと言われたら俺は迷わず彼女を選ぶだろう。

薄情と呼ばれようともいい。

俺の存在価値はあの日に決まってしまったのだ。

「難しい顔しちゃってるけど、また変なこと考えてるでしょ？」

ぼんやりと彼女の横顔を眺めていたら不審に思われたらしい。

「お前は相変わらず可愛いなって思ってただけだよ」

誤魔化すようにいつもの常套句を口にする。

「はあ、また心にもないことを言ってる誤魔化そうとしてるでしょ」

さすがに言われ慣れてしまったのか、当初は顔を赤くしていたこの言葉も通用しなくなってしまったようであった。

だが、心にもないとは心外である。

俺は心の底から彼女……因果彌（ちなみ かや）という少女を美しいと思っている。

外見だけじゃなく、心も全てが美しくも愛らしい。

「あのさ、たまに心の声が独り言で漏れ出すのやめてほしいんだけど……」

「おっと、すまない」

どうやら心の声が一部漏れ出ていたらしく、顔をわずかに赤くして苦い顔をしている彼女に謝罪する。

悪癖ではあるが、彼女の容姿を賛美する際に心の声が漏れ出てしまう時があるらしい。

そのせいで俺が彼女のことを好きであるとか、付き合っていると思われているそうだが、見当違いも甚だしい。

俺は彼女を恋愛対象として見ていない。  
表現が難しいところだが、あえていうなら崇拜、畏敬の念を抱いて  
いるだけである。

それこそ命をかけて守りたいほどに。

彼女が幸せになるならそれでいい。

彼女を幸せにしてくれるなら俺じゃなくていい。

あの日、俺は彼女に救われた。

俺の命は彼女がいなければ存在しなかった。

ゆえに俺の命は彼女のためにある。

そう、俺の夢は……彼女のために死ぬ。

ただそれだけのために生きていくというクソデカクソ重感情を隠  
しながら日々彼女につきまとっている。

幸いなことに、仲の良い友人関係は築けている自信はある。

ゆえに、このまま友人関係を維持しつつそばにいて守り続けられ  
い

「キミがいつもそういうこというから、みんなが誤解して……そのさ、  
あの……彼氏ができないとか言われることあるし……」

ゴニヨゴニヨと歯切れの悪い言葉であるが、彼女の言いたいことは  
わかった。

「俺が近くにいると男が寄ってこないって言うことか？」

「うー……ん、まあ、そういう意見もあるというかなんというか？」

モジモジと気まずそうにしてる姿も可愛い……いや、そうじゃな  
い。

どうやら俺のせいで彼女の幸せを邪魔しているという由々しき事  
態が起きているらしい。

「そうか、すまない。」

それであれば学校で近づくのはやめよう。

でも、何かあればすぐに連絡してほしい」

一緒にいる回数が減るということはそれだけ危険から守る難易度  
が上がるということを意味しているが、それでも彼女の幸せが第一で  
ある。

「くう……ぐぬ、なんでそうなるかなあ」

ギリギリと歯軋りをするかのようには表情を歪めているのを見てどうやら何か間違えたようだと思察するが、何を間違えたかも分からないとはいえフオローだけはしておこう。

「俺はお前の幸せだけを願ってる。」

だから、俺のことなんて気にせず彼氏を作るといい。

もし相手がクソ野郎だったときは俺がどうにかしてやるからさ」  
完璧なフオローだと笑顔も浮かべておく。

彼女は優しいから俺なんかのことを気にして恋愛をすることに気が後れしていたのかもしれない。

たしかに異性が常に一緒にいたら気を遣ってしまうだろう。

これに気づかなかったとは、本当に悪いことをしてしまった。

「カツチーン！」

バーカ！バーカ！アホ！ニブクソタラシ野郎のバーカ！

こつちがどんな気持ちで……バーカ！」

もう知らんと言わんばかりに罵倒して走り去ろうとしていくその後ろ姿と近づくエンジン音にぞくりと、悪寒が走った。

まずい。

何かがまずい。

走れ。

思考より先に身体が動く。

彼女に追いつき、服を掴み、強引に後ろに引き倒す。

身体の勢いは止まらない。

勢いをつけすぎた。

引き倒した反動で足がもつれそうになる。

何かが迫る。

横から来るエンジン音。

あ、これ死んだ。

神様からの最後の贈り物なのか、思考が緩やかになったわずかな時間。  
視線を彼女に向けたら尻もちをついて呆然とこちらを見ていた。

ああ、無事だった。  
それならいいや。

見えてるかわからないけど、彼女に向けて笑顔を向けた。  
そして、心で。

”ありがとう”

ブレーキ音とぐしやりと自分の身体から響く破碎音。

ゴロゴロと視界が何度も周り、ようやく止まる。

体が動かせない。

何も聞こえない。

痛すぎてもう痛覚がおかしくなっているのもわかる。

これは見なくてもわかる。

多分死ぬ。

でも、俺の夢は叶った。

彼女のために死ぬ。

ありがとう神様。

俺は幸せだった。

『因果の破壊を確認いたしました』

意識が薄れそうになるとき、脳内に無機質な声が響く。

『本来死ぬはずであった存在の因果を覆し、因果を破壊した貴方には  
情報が与えられます。』

あなたが助けた少女は未だ死の因果が残されております』

ふざけんな。

身体に力が戻る。

彼女の死が決まっていた？

そのままならまた死ぬ運命にあるだって？

嗚呼、世界よ。

世界が彼女を殺すというなら俺が全部覆してやる。

『あなたの選択を楽しみにしています』

目を開ければ赤く染まった視界の中で彼女が泣きながら何かを叫んで呼びかけている。

「お前は俺が守るから」

意識がもうもたない。

だが、俺は死なない。

これは俺が彼女を幸せにするための物語じゃない。

彼女が幸せになるための物語だ。

俺は薄れゆく意識の中で因果への反逆を誓った。



## 2、彼女の気持ち

一定のリズムでピツ……ピツと、音を発する電子音。管に繋がれた呼吸器から漏れ出すわずかな呼吸音。

ただそれだけの音がする空間で私はようやく落ち着くことができた。

血を吐き出し、真っ赤に染まって身動きをしないアイツを見てから私は必死に狂ったようにずっとアイツを呼び続けていたことは覚えていいる。

頭が真っ白になって、こんなのは現実じゃない。

目を覚ましてほしいという現実逃避をしていたかのようにもはや何を言ったかも覚えていない。

今でこそ心臓は動いているが、搬送中にアイツの心臓は止まっていたらしく、必死に救急隊員の人が蘇生措置を施しているところを泣きながら見ていることしかできない悔しさは一生忘れることはできないと思う。

「なんで私なんて庇ったのよ。

私を守るなんてあんなのただの冗談だと思ってたのに……」

涙が止まらなかった。

ここまで大切に思われていたことに気づけなかったことも、自分の短慮な行動で危うく彼を殺しかけてしまったことが自己嫌悪に陥らせる。

「ねえ、どうして……」

意識のないアイツに話しかける。

答えは当然ない。

でも、アイツはいつだって私の幸せを願ってくれていた。

私を守ると言ってくれた。

一度、どうして私に優しいのかを聞いたことがあった。

救われたから……と。

いつか恩を返したいのだと全く身に覚えのないことを言われて疑問を返したことも覚えている。

身に覚えのない恩だからこそ、彼のいつもの言葉もただの口実のよ  
うなものだと思つて軽く考えていたけれど、その認識は間違えていた  
ことを知ってしまった。

彼は心から私を守ると、私を幸せにするためなら命すらかけるつも  
りだったのだ。

アイツが私を庇つた瞬間、その表情を見てしまった。

死の間際と認識してなお、彼は私を見て安堵の表情を浮かべていた  
のが目に焼き付いている。

その表情があまりにも優しくして私は目の前で起きたことを現実と  
理解するのに時間がかかつてしまうほどにそれは異質だった。

「まだ何も言っていないのに」

二度と意識が戻らなかつたらどうしよう。

脳裏によぎる最悪の事態にまた涙が溢れ出す。

峠は越えたとはいえ、いつ意識が戻るかはわからないらしい。

下手をすれば……。

そんなのは嫌だ。

嫌だ。

嫌だ。

もうアイツが私に笑いかけてくれないなんて……考えたくない。

「ばかやろー……私をこんな気持ちにさせた責任とれよお……」

涙が止まらない。

もう化粧はぐちゃぐちゃになって見れた顔じゃなくなってるのは  
見なくてもわかる。

最初に変なやつに付き纏われてるって思ってたけど、いつも親切だ  
から気にしなくなった。

何かあるときりげなく庇ってくれて、いつも最初に味方になってく  
れて、気づいたらいるのが普通になっていた。

これが恋だと気づいたのがいつだったかは覚えていない。

でも、恋だと気づいたからこそアイツは私のことを大切に思ってく  
れてるけど私には恋をしていないんだとすぐ気づけた。

視線が違う。

アイツはいつも優しい。

それはまるで大切な家族を見るかのような安心させてくれる視線。情欲など微塵も感じさせない。

自慢ではないが、それなりにモテる私はいつも男子の情欲に塗れた視線に晒されてきた。

その手の視線には割と敏感だからこそ、嘘のないその温かさに安心感を覚えていた。

パパもママもアイツには気を許していて、恋人じゃないと否定しても信じてくれないほどに信頼を得ていたくらいである。

祈ることしかできない自分の無力さが辛い。

腕を動かさないようにそっと力なく置かれている手のひらに自分の手のひらを重ねる。

温かい体温に安堵する。

不安がわずかに解消する。

その不安を手のひらから察したのか、弱々しく手のひらが握り返される。

「ありがとう」

意識が戻っていないのはわかっている。

それでも、彼が私に泣くなど言っているような気がして少しだけ笑うことができたのだった。

### 3、光を得た日

平気なふりをして無表情で周りに合わせて辛いのに無理矢理取り繕っている。

辛い。

家に帰りたくない。

学校に行きたくない。

泣いたらダメだ。

俺は強い。

必死に自分を思い込ませて何でもないふりをしている自分が見え  
た。

嗚呼、これは夢だ。

目の前の懐かしい情景にすぐに夢だと気づいた。

明晰夢というものなのか、動くことのできない自分の意識とは反対に次々と場面転換をしていく。

父親にはどうしてお前は出来が悪いのだと言われて殴られた。

母親は俺には興味がなかった。

中学のクラスメイトからはまるでいない人間かのように扱われる。

こいつは無視していい奴。

殴っても誰も気にしない奴。

いつしかそんな暗黙の了解があつた気がする。

でも、殴られるのは慣れてるし、毎日のように殴られてるわけでも、病院に行かなければいけないほど強く殴られるようなこともない。

だから、どうでもよかった。

家でも学校でも俺はそういうモノだつて思っていたから。

そうやって俺はいつかないものとして扱われて流されて生きていくんだと思考を停止していた。

鮮明な記憶が蘇る。

「おーい、これ落としだよー」

声に思わず振り向くと、小走りに見覚えのない女子が手を振って追いかけてきた。

自分に話しかけたわけじゃないかと判断してすぐに前を向く。  
そもそもこの学校で自分に話しかけるものは教師くらいしかない。

「ちよつとちよつと、何その反応っ！」

ポンと肩を叩かれ、ようやく勘違いではなく自分に話しかけているのだと気づく。

「はい、落とし物」

手渡されるスマートフォン。

どうやら下駄箱で靴を履き替える時にポケットからこぼれ落ちていたようだ。

緊急連絡用として持たされているだけでほとんど使ったこともないため、意識しなければ持つていることすら忘れそうになる物程度の認識だった。

「ありがとうございます」

感情の籠らない声でお礼を言い、小さく頭を下げる。

この学校で声をかけられたのはいつぶりだろうと些細なことを思いながら再び歩き出す。

家に帰りたくない。

またどこかでギリギリまで時間を潰そう。

家は門限などあつてないようなものではあるが、中学生である以上は補導されないように時間を潰す必要がある。

同じ場所にいつもいると通報されかねないため場所選びには注意していた。

部活動でも入ればもつと上手く時間を潰せるのかもしれないが、この学校ではないものとして扱われている自身にとって部活動などできるはずもない。

今日は何をして時間を潰すか。

今日も筋トレかなと、帰り道にある河川敷へと向かい、上着と靴を置く。

腕立て、腹筋、スクワットなど、基本的な筋トレは無趣味の自分にとっては良い暇つぶしになった。

読書も勉強も嫌いではないが、父親の影響でやらされている感を覚えてしまい、どうしても家のことが頭から離れない時がある。そういう時はいつも決まって無心にトレーニングをしている。部活もやっていない。

目標もない。

使う機会もない。

無意味だからこそ、トレーニングをしたくなる。

きつとこれが誰から強制されずに自分の意思で決めた唯一のものだからなのかもしれない。

息を切らしながら、また無意味なことを考えていることに気づく。疲れた。

終わらせたい。

帰りたい。

帰るってどこに？

家に？

帰りたくないんだろう？

トレーニングは楽だ。

帰りたくない家にも帰りたいと思わせてくれるから。

「ダメだな」

今日は雑念が多すぎた。

きつと、珍しいことがあったからだど落とし物を拾ってくれた女の子を思い出す。

無駄な思考だと頭を切り替えようとしたとき、ふと伸びた影に視線を向ければ図ったかのようなタイミングでそいつがいた。

「あ、気づいた」

何でここにいるんだという疑問を飲み込み、鞆と上着を持って立ち去ろうとするが、腕を掴んで止められてしまう。

「無視しないでよ」

「俺に話しかけていたと思わなかった」

スルリと意識せずに出た言葉がこれである。

コミュ障極まりないことは自覚はあった。

「いや、ここキミしかおらんやん」

こちらの切り返しを冗談だと思ったのか、笑いながら突っ込まれる。

「ここ私も帰り道でさ、前から何度もここで走り込みとか筋トレしてるの見かけてたんだけど、なんでそんなに鍛えてるの?」

「何も考えたくないから」

一言でいえばそれだけの理由である。

特に意味も何もない。

「えー……想定外の回答なんだけど、それでなんで筋トレなのか全然意味わからんわー」

「無心になれるならなんでも良いんだよ。」

でも、どうせなら無駄にならないことをしておこうって思っただけで筋トレしてた」

きっとこれも久々の会話で興が乗っただけなんだろう。

いう必要もない、誰にも言ったことがなかった理由を思わず口にしていった。

今日はもう帰ろう。

結局は帰らなければいけないのだからと、自分に無理矢理言い聞かせて女子の横を通り過ぎる。

今日初めて会った知り合いですらない人間に挨拶は不要。

もう二度と関わることはないだろうと無言で歩き出す。

「あ、ねえ、ちよっと!」

帰るの?

ねえってば!」

振り向かず、聞こえていないフリをして歩く。

本当に今日は珍しい日だ。

「はあ、まあいつか。」

またね。バイバイ」

とても懐かしい大切な記憶だった。

彼女と初めて関わった日。

これがきつかけ。

きつと、この日から俺の心は彼女に救われていたのかもしれない。  
このときの俺はまだ誰かに自分という存在を見てもらえる喜びを  
理解できていなかった。

本当に懐かしい、いろいろなことを思い出させてくれる回想だっ  
た。

世界から彼女を守ると決めた。  
だからこの夢はきつと守る意思を強く持ったために原点を思い出さ  
せる無意識の発露なのだろう。

俺はお前に泣いて欲しくない。  
だから起きろ。

俺の命はそのためにあるのだから。

「そんな泣くなよ」

ゆっくりと目を開けるとそこには涙で化粧が崩れてグチャグチャ  
な顔をして覗き込む彼女がいた。

「お前が無事ならそれでいいんだから」

呼吸器が邪魔で声が出にくい。

でも、庇われたことで自分を責めて欲しくなかった。

彼女には笑顔が似合うから。

俺のことなんかで影を落として欲しくなんてない。

「ばがあ!!!」

私だけ無事でどうずんのよー!」

私の気持ちを考えてよお」

ボロボロととめどなく溢れ出す涙を見てその優しさが嬉しくなっ  
た。

自分のような者にもこんなにも泣いてくれることがたまらなく嬉  
しかった。

こんなにも優しい人を守ることが出来るができてよかった。

俺は心からそう思うことができた。



#### 4、逃げ道なしのピタゴラススイッチⅠⅤⅠ

全身が痛すぎてやばい。

痛すぎて気持ち悪い。

意識が戻ったのはいいが、痛みに狂って叫び出したくなる状況といえはわかりやすいだろうか。

まあ、時速100キロ越えの車に吹っ飛ばされて内臓破裂と全身骨折だらけだと聞いたので生きていただけ儲け物なのだろうが、痛いものは痛い。

不幸中の幸いだったのは上半身の怪我が酷い割には足の怪我は軽く骨にヒビが入っていただけくらいで済んでいたことだろう。

「大丈夫？」

そして、何よりも問題なのは心配そうに今にも泣きそうな表情で甲斐甲斐しく世話をしてくれる彼女の前で痛いと言えないことだ。

そんな泣きそうな顔されたら正直に痛すぎて狂いそうなんて言えるわけがないのである。

「ああ、うん、まあ……だいたい落ち着いたかな」

嘘である。

もう痛くて痛くて仕方なくて、脂汗が常に吹き出しているレベルである。

「ここまできたら完治するまで嘘を突き通すことを心に誓う。」

「それならよかった」

ほっとした表情ではあるが、その表情には隠しきれない暗い感情が見える。

負い目を感じている今の彼女には気にしなくていいと言っても無意味であろう。

現に毎日時間が許す限りお見舞いに来て世話を焼いてくれるのだからその心情は察せないわけがなかった。

こちらとしてはあのとときの世界の意思っぽい声が発した因果のことを考えると一緒にいた方が庇いやすいので都合が良い。

しかし、次はいつ彼女に不幸が訪れるのかがわからない上に、現状

まともに動けないので焦燥に駆られてしまう。

「そんな顔すんなよ。」

俺もお前も生きてんだからさ」

一瞬気まずそうな表情を浮かべ、次の瞬間には眉を寄せて複雑そうな表情に変わる。

これは言い返したいけど何を言っていないかわからない顔だなと察する。

「いろいろ言いたいことたくさんあったけど、今はやめとく」

頬を膨らませて上目遣いに睨みつけられても可愛いだけである。

「あ、そうだ！」

出れてない授業については全部ノート取ってあるから……あ、」

ゴソゴソと鞆を漁り、取り出して渡そうとした手から滑り落ちたノートが”運悪く”ナースコールの上に落ち、ノートが跳ねるようにして放物線を描いて飛んでいく。

ノートは”運悪く”花瓶へと当たって、倒れた花瓶が彼女の頭へと当たろうとする前に強引に彼女の腕を引いて胸に引き寄せる。

「ぐうっ！」

がしやんと、花瓶が床に落ちて割れた音が響き渡る。

骨折した腕を使ってしまったことで血反吐を吐きそうなくらいの激痛が走る。

引き寄せた彼女の頭が胸の傷の部分で受け止めたことよって激痛で狂いそうになるが、辛うじて悲鳴を噛み殺す。

痛みを無視し、腕の中の彼女に大丈夫かと、問おうとした瞬間、痛みが急に引き、またあの事故のときのような周囲の景色がゆっくりと進むような感覚に襲われる。

『おめでとーございませす。』

2回目の因果破壊に成功しました』

聞き覚えのある無機質な声。

朦朧とした意識の中で聞いたあのときの声はやはり妄想の類ではなかったのだなとあらためて思う。

元々、妄想の類にしては脈絡もなく、死の間際の無意識のものとも

思えなかったので何か神の啓示の類だと考えていたが、どうやら合っているのかもしれない。

まるで自分だけがスローモーションの中で普通に動けるような目の前の光景はとても現実のものは思えず、超常現象であることを雄弁に証明していた。

『2回の因果の破壊に成功した貴方には新たな情報が開示されます。

一つ、貴方とその少女の因果は重なっています。

本来、少女の因果は未来が存在せず途切れておりましたが、貴方によって破壊されたことによる矛盾修正のために因果の鎖はその場で最も関わりの深い貴方の因果の鎖に絡みつき、結合いたしました』  
生きている限りは因果というものが発生するが、逆を言えば死ねば因果は発生しない。

本来そこで途切れるはずだった因果と、生きているのに因果がない存在。

あり得ない不可逆の事象ゆえの想定外の修正なのかもしれない。

『二つ、絡みついた因果によって、貴方が死ねば共生する因果も破損し、途切れた因果によって少女は死に至ります』

「は？」

『現在の貴方は存在しない因果を補填する存在となっています。

それゆえに貴方たちの因果はいつでも死を受容することが可能な状態となりました。

本来、因果というものは定められたものであり、定められた因果に沿って人は生き、死ぬようになっていきます』

こちらの反応などお構いなしに聞いてもいないことをペラペラと話し出しているが、こちらとしてはそれどころではない。

彼女と自分が運命共同体となってしまうことである。

それは自分の夢である”彼女のために死ぬ”ことができなくなると同義であった。

『死ぬはずがない因果と死んでいるはずの因果は相殺しあい、本来ならば定められた年齢まで死ぬことがなかった貴方はいつでも死ぬことができるようになりました』

「そして、死んだらあいつも同時に死ぬということか」

『その通りです』

思わずこぼれ落ちた言葉に反応する世界の意味。

こちらの反応など気にせず喋り出すだけの存在だと思いきや、普通に受け答えもしてくれるのだなと少し驚く。

「一つだけ聞きたい。さっきの花瓶が当たるのを防げなかったらどうなっていた？」

『花瓶は頭部に当たり、2日後にくも膜下出血により死亡しております。』

防ぐことができなかった貴方は自身を憎悪しながら自殺しております』

なぜ俺の末路まで語るのだという疑問はあったが、自分を憎んで自殺というのが信憑性がありすぎた。

間違いなく自分ならやるだろうという確信すらある。

『3つ、少女の不幸は貴方といると起こりやすくなります』

それなら俺が距離を取れば……。

『ただし、貴方と少女が離れている時間が長いほど少女の因果は弱り、死ぬ確率が上昇します。』

世界は因果の矛盾を嫌い、あの少女を排斥しようと死の因果を用意しますが、因果を共有する貴方だけはそれを覆す可能性を有しております』

思考を遮るように先回りされるが、随分とムカつくルールを考える奴がいるものだ。

さっきの不自然な落ちたノートの跳ね方などもその因果とやらが促した結果であることは間違いないのだろう。

突発的ピタゴラスイッチとかシャレにならなすぎる。

たまたま落としたノートの角がナースコールの角に当たって飛び跳ねて花瓶の方に向かい、当たった花瓶はノートが飛んできた方向に倒れ、しかもピンポイントにあいつの頭に当たっていたなんて宝くじが当たるより希少な確率だろう。

今の説明を聞いていなければとてもではないが信じられない。

だが、今後もそんなあり得ない事象が重なっていくと考えると……。

「マジでクソゲーじゃねえか……」

『以上で情報の開示を終了します。』

貴方の健闘を楽しみにしております』

その言葉を最後に止まっていた景色が元に戻ると、突然抱き寄せられたことで顔を真っ赤にして俺を見上げる彼女がいた。

「悪いな。お前が可愛すぎてつい抱き寄せちゃったわ」

止まった世界から戻ってきて急に復活する痛みを我慢して適当なことを言って誤魔化す。

気を失わない自分を褒めてあげたい程である。

激痛に苛まれていることを知られ、さらにそれが花瓶が頭に当たりそうだったから庇ったからなどと言えばまた泣き出すのが簡単に予想できるので我慢の一択である。

「んな……うん」

何も言わずに胸に顔を埋めてくるが、表情を見られたくないからなのだろうが、怪我人ってことを忘れんでくれ。

そこめっちゃ痛い。

モルヒネ欲しい。

まあでも、この痛みも生きてる証拠かと、大切な少女が与えてくれる痛みを受け入れるのだった。

ちなみに、後で医者に怒られた。

## 5、なんだかんだで慣れてきた

ようやく退院ができた。

幾度となく医者と看護師に怒られながらも苦痛に耐えた道のりだった。

退院までで一番やばかったのはどこから飛んできたメスが腕のギブスに突き刺さった件だろうか。

どこかでガチャンという音がして即座に警戒したのが功を奏したと言つてもいい。

もしメスが飛んでくる射線に割り込まなかったら彼女の心臓に突き刺さっていたコースであった。

とりあえず防げれば良いと庇った形でギブスで受け止められたのは幸運でしかない。

なあ、世界さんよ。

一体どうすれば別の部屋で落としたメスがこちらに飛んでくるのでしょうかねえ。

殺意マシマシのピタゴラススイッチは本気でやめてほしい。

しかし、現実は無慈悲である。

病院側は危うく大怪我になってしまいうミスを犯したということで大騒ぎとなったが、因果という殺意マンの存在のせいと知ってる自分としては逆に申し訳ない気持ちの方が大きい。

不祥事を黙る代わりに今後いろいろ便宜を図ってくれるということになり、むしろラッキーなくらいである。

今後も間違いなくこの病院には何度も世話になることになるのだから。

世話になりたくなくても世界さんが無慈悲すぎてツライ。

しかし、2回目の因果破壊以降は世界さんからのメッセージはないため現状どうなっているのかはよくわからない。

退院の手続きを済ませ、久々に病院外に出て吸う空気はどこか特別な感覚を覚える。

やはり、人間は外に出るのも必要だ。

これから病み上がりで心配だからとついてきた彼女と一緒に家へと帰るのだが、正直憂鬱である。

あの親どもは結局一度も見舞いにすらこなかつたと言えどもわかりやすい。

むしろ、いろいろと手続きやらと世話を焼いてくれたのは彼女の両親の方であり、今日も車で迎えにくるとまで言っていたが、仕事を休んでまできてもらうのは流石に心苦しいため丁重に断らせてもらった。

その優しさに涙すら出そうになる。

やはり、こんなにも素敵な両親に育てられたからこそ彼女はあんなにも素晴らしい人間に育つたのだなと心から思う。

俺のようなどうでもいい人間のために時間を使うことを気にもせず、娘の恩人が何を言っているんだと逆に感謝すらするような方々なのだ。

嬉しい反面、迷惑をかけたくはなかった。

病室で感謝の言葉と共にこれからも娘を頼むと言われてうれしくなり、任せてくださいと返したのは良い記憶である。

この言葉だけでしばらく生きていけるくらい心が軽やかになったのは内緒である。

その信頼に応えるためにも、彼女がいつか誰かを好きになり、結婚するまでは俺が絶対に守ろうと改めて誓う。

「ちよつと待った」

横断歩道の信号が赤から青に変わり、一步踏み出そうとした彼女の腕を引いて抱き寄せる。

「ええっ！ちよっ！」

急に抱き寄せられ、顔を赤くして驚く彼女の目の前を信号無視してオートバイが走り抜けていく。

嫌な予感の中。

外に出てわずか数分でこれかよと、ゲンナリする。

「バイク来てたから」

「ありがとう……」

頬を染めたまま、俺の顔を覗き込んでじつと目を見つめてくる。  
いやいや、なんだこの空気。

最近のあなた変ですよ！と、言いたい気持ちをごつと堪える。

そもそも、歩道のご真ん中で抱き合った状態で立ち止まってるとか  
どんなバカツプルだと脳内で無駄にツツコミ続ける。

最近彼女の様子がおかしい件について。

誰か助けて。

友達に相談しよう。

あ、でも俺そもそも友達いなかったわ。

「やっぱりキミは優しいよね」

笑顔が眩しい。

これももう天使だと思う。

この笑顔見せたら惚れない人はいないと思うが、変な男はダメだ。

チャラ男も許さん。

浮気しないでこの子を守る覚悟があるやつは好きになっていいぞ。

「俺が優しいのはお前にだけだよ」

「……や、マジやっぱ」

目を丸くして何事かを呟いているが、いつまでもここにいても仕方がない。

「ほら、突っ立ってないでいこうぜ」

ギブスをしていない方の手で彼女の手をとって歩き出す。

「う、うん」

「ほら、下向いて歩いてると転ぶぞ」

なぜか下を向いたまま顔を上げようとしなない。

「ちよつと待って、ほんとちよつと待って、今顔見れないから」

女心は本当によくわからない。

手を繋いだのが恥ずかしかったのだろうか。

手を繋ぐくらい今更だろうにと、小さく笑みがこぼれた。



## 6、いろいろやばくなってきた今日この頃

前々から一緒に登下校をしているので退院する前と後で何も変わってはいないと思いたいが、なぜ手を繋ごうとするんでしょうか。お嬢さん、前はそんな積極的に手を繋ごうとする癖なんてなかったでしょうに。

いや、ちがうな。

口には出さないけどまだ外が怖いのもかもしれない。

あんな大事故を目の前で目撃してしまったのだ。

トラウマになっていても仕方がない。

何となく手が震えているような気もするし、気まずそうに顔を俯かせているのもトラウマとなっているそれを手を繋いで誤魔化そうとする自分を恥じているのかもしれない。

これは何も言えないな。

あえて触れずに彼女の不安が消えるまでされるがままにしておく。

手を繋いだ状態で無言のまま学校への道のりを歩く。

その間も警戒は怠らない。

些細な音から殺意のピタゴラススイッチが始まるということは幾度となく実感しているからだ。

カキーンという野球部のバツティング練習の音。

なんとなく嫌な予感に駆られ、彼女の手を引いて抱き寄せれば、当然のように頭上から落ちてくる野球の硬球である。

抱き寄せていなければ間違いなく頭部直撃だったであろう。

しかしまあ、世界さんの殺意がこの程度で終わるわけがない。

世界さんの殺意は隙を生じぬ2段構え。

それを知ってるので油断はない。

地面にぶつかつた硬球はバウンドし、近くに落ちていた細長い鉄筋へと向かう。

あ、これいつものパターンだと思考よりも先に腕が動く。

手にしたカバンを抱き寄せた彼女の前へ盾のようにして構えれば、

そこには厚さ10mm程度の鉄筋が靴に突き刺さって停止していた。教科書なかつたら確実にカバン突きぬけて死んでたやつだこれと、ゾツとして冷や汗が止まらない。

最近、難易度が高くなってるように思えてならない。

今日のは過去一でシヤレになっていない。

正直言えばなぜ防げたのか分からないくらい奇跡の防衛でしかない。

「あわわ……うあ、あれなな……」

腕の中で余りの理解不明な状況に血の気が引いた表情で驚きに呂律が回らないといった様子で震えている。

「大丈夫だから」

震えながらギュツと腕を掴んで動揺を隠せない彼女を抱きしめる。

「今回は怪我もないし、怖くない怖くない」

今までは何があつたかを上手く誤魔化してこれたが、今回は完全に見られてしまったから誤魔化せそうもない。

だからといって、因果がお前を殺しにきているとか言つたところで頭がおかしい人認定である。

あの超常現象な光景と声を聞かなければ自分も絶対に信じていないだろう。

「なんか最近すごい良くないことばかり起きてる気がするんだけど……」

ほとんど泣く寸前の声だった。

どうやら漠然とした不安は覚えていたようであり、言葉に表せない何かはストレスなのだろう。

真実を教えるべきか、最後まで隠し通すか。

考えてみよう。

『あなたは今後もこういう謎の事故が死ぬまで起き続けていつ死ぬかわかりません』と言われた場合……仮に信じたとしたら俺なら自殺したくなるな。

いっどこから何が飛んでくるか分からない状況でそれでも生きようと思える人はそう多くはない。

人の精神が弱いことなんて自分が誰よりも知っている。  
彼女に継ぐことで生きている自分のように人は人が思うほど強くない。

一人で乗り越えて進める人間などひと握りであり、俺も彼女もひと握りではないのだから。

「いや、むしろ本当に死ぬような目にあつたとしても死んでないんだから、これ逆に運が良くね?」

秘技、逆転の発想を促してみよう。

「た、たしかにそうかも!」

チヨロい。

こんな簡単に誘導されてしまうと将来不安になるが、今はそれが助かるので良しとしよう。

「だろ? 現に今のでなんも怪我してないし、鉄筋飛んできて無傷つて運よすぎだよな」

教科書さんたちはお亡くなりになったけど、彼らの尊い犠牲に敬意を表しておこう。

あとで買い直さなきゃなと内心でため息をつく。

「そっか、そっか、そうだよね!」

うんうん、最近前よりくつつくこともできるやうになったし……だからその……」

ゴニョゴニョと尻すぼみに声が小さくなって何かを言っているが、どうにか誤魔化したのでよしとする。

「あ、あのさ、なんで私のこと守ってくれるのかなー……って、気になってるから教えてくれたらなー……なんて」

抱き合った状態で上目遣いでモジモジと身を振らせながら問われる。

心なしか瞳は潤み、頬がわずかに紅潮していた。

「俺にとってお前が一番大切な人だからだよ」

隠すことではないので素直に答えれば、彼女は見上げていた顔を胸にうずめ、うめき声を上げながらバンバンと肩あたりを何度も叩く。

いきなりなんやねんと突っ込むのは野暮なことだと過去の経験的

に知っている。

「ここはされるがままにしておくことにする。

「じゃあさ、私のこと……好き……なの？」

胸に顔を埋めたままのせいか、聞こえるかどうかギリギリくらいの小声だった。

「ああ、好きだよ」

これもまた隠すことも、言い淀むこともなく、今更何をというくらいにの気持ちで微笑みすら浮かべて告げる。

「わ、私も……好き……だよ」

ちらりとこちらを見たと思えば、すぐに顔を隠してわきゃーと何事かを呟きながら興奮している。

彼女がなぜ興奮しているかわからないが、初めて好きと言ってもらえてこちらも嬉しかったので気持ちはわからなくはない。

もしかしたら俺と彼女は今日親友へと関係が上がったのかもしれない。

この友情をいつまでも大切にしたい。

心の中から湧き上がるこの喜びを今は噛み締めていようと思うのだった。

## 7、きつと心は通じ合っている

学校についても彼女の表情は終始ニコニコ、によによと緩んだままである。

時折こちらの顔を見て照れ臭そうに顔を逸らすのは可愛いのだが、何か不安になるものがある。

もしかして、何か対応を間違えたのだろうか、考えてもここまで道のりで誤った反応をしたとも思えないのだ。

自分の知らないところで何かあったのかを聞きたいところではあるが、とても聞ける空気ではない。

しかし、何かあったのだとしてもそれが負の感情によるものではないのではなさそうなので気にしなくてもいいのかもしれない。

幸せそうに笑っていてくれるのならそれでいい。

「な、なによ……」

下駄箱で靴を履き替えながら、ついじつと見つめてしまったことで不審がられてしまったようだが、その緩んだ表情は隠せていない。

もしかしたらこんなにも緩んだ表情を見るのは初めてかもしれない。

「ん、うれしそうだなって思って」

「だって、好……きつて……言ってもらえたのうれしかったし……？」

顔を真っ赤にしてモジモジと身をくねらせ、しどろもどろに言う姿が愛おしくなり、思わず頭を撫でる。

「そっか」

そんなにもあの言葉が嬉しかったのか。

やはり気持ちは素直に伝えてこそ、しっかりと伝わるのだなと思う。

同時に、俺たちは心が通じ合っているのだと改めてうれしくなってしまう。

「今日のキミはホント卑怯だよ」

「よくわからん」

真っ赤な顔なまま頬を膨らませる彼女を見て首を傾げる。

「だって、私の言って欲しいこともしてほしいこと沢山してくれんだもん……」

表情を隠すようにガバリと腰に手を回して抱きついてくる。

なんか今日は甘えたがりな日だなと、されるがままにさせておいた。

「ヨシ、充電完了！」

私こつちだから先行くね！」

うきやーとか、ひゃあーとか小走りに去っていく姿を見て廊下は走ると危ないぞと言っておくべきだっただろうかと真面目なことを考えてしまった。

背中を見送り、手を振りながら因果の収束について思考を巡らす。

これまでの経験や世界の声から察するに、死の因果の発生要因は距離が関係している。

条件として彼女と近い距離にすることで因果は収束し始める。

しかし、彼女が家に帰ったりして一緒にいないときは因果そのものが存在しないため死の因果は発生しない代わりに、一定期間自分と離れ続けていると結合している因果が剥がれ始め、因果の存在しない人間という矛盾を排するために世界は別の要因として動き出してしまふということだろう。

それがどれほど離れていると起きるのかはわかっていない上に、試そうとも思わない。

入院していた頃の見舞いの頻度などを考慮すると、おそらくは1日か2日くらい会わないくらいであれば問題はないと思われる。

完全とは言えないが、今の何もかもが手探りな状況においては48時間以内には必ず会話をデッドラインとすべきだろう。

そして、学校内の距離については正直不安要素が残っている。

どれほど近い距離であれば死の因果を引き起こすのか。

今となつては幸いなことになるのかもかもしれないが、彼女とは別のクラスで物理的に距離が離され、部屋を隔てている。

これも検証しきれていない要素であるが、距離が近く、壁などで遮られていない同じ空間にいる場合にのみ因果が発生しているのかも

しれない。

それを考えれば油断はできないが、授業中には何も起きないと考えている。

これがもし同じクラスで席が近かったら大惨事だったかもしれないと、思わず身震いしてしまいそうだった。

そして、努めて気にしないようにしていたが、視線がすごい。

ものすごくみんながこちらを見ている気がする。

不幸中の幸いなことに、手足の骨折はそこまでひどくなかったおかげで今となつてはギブスは外れているため、見た目は普通の状態のほずである。

内臓の一部は大手術をしたのでしばらくは投薬生活が続くが、それも見ただけではわからないはずなのだが、自意識過剰ではなければ明らかに注目度が高い。

なんとなく気まずくなり、居心地の悪い気分を味わいながら視線を避けるようにして教室へと向かうのであった。

## 8、天啓得てして、思考は止まる

「お、きたきた。」

無事退院できてよかったなー。

事故ったって聞いてマジで心配してたんだぜ」

教室に入り、いつものように机に向かおうとするとこちらに気づいたクラスメイトたちがぞろぞろと集まってくる。

彼らとは特に仲は悪くなかったとは思うが、逆に特別仲も良くもなかったはずである。

こんなに歓迎されるような交友関係だったであろうかと内心で首を傾げてしまう。

「心配してくれてありがとう?」

交友関係を考えれば疑問符がついてしまうのは仕方ないことである。

「なんで不思議そうなんだよ……。」

こつちとしてはお前がいつも彼女優先しまくりで声かけにくかっただけで心配してたのは本当なんだからな」

「そうそう、本当はみんなで見舞いにも行こうと思ってたけど、彼女さん毎日病室通ってたみたいだから邪魔するのもなんだったからさー」

どうやら悪い意味ではなく、単純に気を遣ってくれた結果ゆえのようである。

「いやでも、ほんと無事でよかったよ。」

俺さ、轢かれそうになった彼女さんの身代わりになったって聞いてぶっっちゃけ尊敬したわ」

なんかすごい暑苦しい勢いで目を輝かせて迫ってくる。

周りも「それなー」とか言っただけで口々に同意しているが、これが同調圧力なのだろうか。

「別に尊敬されるほどすごいことじゃないよ。」

俺がそれをしたからそうしただけだし」

そう、尊敬されるようなことではない。

俺は俺のために命を捨てても守りたいものを守っただけでそこ



には立派な心構えも、志もない。

己の欲に従い、ただひたすらに守ると決めた者のために動いたにすぎないのだ。

「照れも躊躇もなく言い切りやがった……」

「普段なら何言ってるんだコイツとか言えたけど、コイツの場合マジでやりやがったから何も言えねえ」

「一途すぎて自分が恥ずかしくなるんだが……」

反応は様々だが、事故に遭う前と今日でかなり反応が違うのは気のせいではない。

もしかして、前から言っていた俺が彼女を守るという言葉は遊び半分で行っていたとでも思われていたのかもしれない。

そうだとしたら心外であった。

「でも、災難だったねー」

超スピード違反してたって聞いたし……無事だったとはいえ許せないよね」

事故以前からちよくちよく話しかけてきてくれた馴染みのある女子である”前島”が私怒ってますとといった様子で背後から話しかけてくるが、なんかいつもより距離が近い気がする。

多分本人は気づいてないのかもしれないが、背中に胸が当たっている。

指摘しようかと思ったが、デリカシーというものが自分には欠けているとよく言われているため、ここは指摘ではなく気づかなかったフリをすることを決める。

「別に運転手を恨んでたりはしないかな」

正直な心境を口にし、さりげなく半歩前に進んで前島と距離を離す。

こういうのが紳士って何かで読んで学んでいる。

「えーなんでよー」

どこか不機嫌そうになって疑問を口にする前島に対し、俺の代わりに怒ってくれているのかなと内心で感謝する。

「いや、あいつが助かって俺も生きてたってことだけで十分だよ」

仮にあの運転手が安全運転をしていたとしても、おそらくは別の因果が彼女を殺そうとしていたことは想像に難くない。

ある意味運転手もまた被害者なのかもしれないというのはさすがに言い過ぎだろうか。

「いやあ、何度言っつけど、そう考えられるのが達観してるというか、マジですげえわ」

わずかに物思いに耽っていると、クラスメイトたちは感極まったようにこちらを見ていた。

なんか教室内がすごく盛り上がってる気がする。

盛り上がってるというより興奮してる？

彼女が少女漫画読んで興奮している時の雰囲気になんか似ていた。

何か取り返しつかない誤解をされている気がしてならない。

「何もすごいことなんてないって。

みんなだつて、本当に大切だと思えるものがあればきつと同じことしたと思うし」

フオローも兼ねて、ここまできたら今更だろうと思っつて自分の正直な気持ちを吐露する。

信念というものは人によって違う。

人によつてその大小はあれど譲れないもののために戦うのは誰であらうと変わらない。

そして、自分はただそれしかなかったからにすぎない。

所詮はそれ以外を何も持たない空っぽな人間でしかないから命をかけた。

実際に命を懸けて守つたその事実だけは自分にとつて唯一誇れるものだから、誤魔化すようなことは言いたくなかつた。

瞬間、きやーと教室で歓声が湧き、思わず目を丸くしてまう。

特に女子の興奮度がやばい。

アナタたちなんでそんなに鼻息荒いの？

「世の男子はこの一途さを見習うべきよ」

「文字通り命を懸けて愛を貫く姿を見てしまった」

などなど何かとてつもない勘違いをされているようでならない。

「いやいや、無理無理」

「普通は動けんて」

興奮する女子とは反対に男子たちは無茶を言うなど首を振っている。

なぜか、さらに誤解が広がってしまった気がする。

「いや、一途とか愛とかそういうのじゃないんだが……」

「いやいや、何言ってるのよ。」

これが愛じゃなかったらなんだっていうんだよ」

どうやら否定は無意味のようである。

変な噂が広がったらせつかく親友になれた彼女に迷惑がかかってしまう。

だが、あえていえばこれはこれで親友として彼女に変な奴が近寄れなくなる虫除け代わりになるのではないか。

彼女は可愛くて、優しく、性格も良く、カリスマ性すら持ち合わせる素晴らしい女性であるがゆえに、この状況は彼氏を選別するのに最適かもしれないと、脳裏に雷が落ちたかのような天啓を得てしまった。

だが、間違えてはいけけないのは対処法であろう。

ここで嘘をついて彼女とは恋人関係だと答えてしまえば事実無根の嘘をついたことになり、親友の信頼を裏切ることとなるのでそれだけは避けなければならぬ。

ゆえに、ここで取る最適解は曖昧に濁す。

これしかない。

そして、結論を出した俺は周囲の興奮とは反対に考えることをやめた。

## 9、恋する乙女は怖い

私は幸福の絶頂にあった。

いろいろと不運が重なり、一時はどうなるかと思っただけけれど、好きな人と両想いになり……カレピの優しさに人目を憚らずに存分に甘えることができるこの状況が幸せじゃなかったら世界はとつくに闇に覆われているに違いない。

しかし、問題は私のカレピがかっこよすぎて優しすぎることである。

なんだかんだで意外と人気あると聞いたことがあるのでこちらとしては黙ってみていることなどあり得ない。

エロくない、落ち着いている、優しい、紳士。

これが彼の女子から得ている評価である。

顔についてはイケメンというわけではないと言っていたけれど、客観的に見ても普通より上だと思うし、なんなら世界で一番カッコ良いまでである。

話しかける時にまず胸を見てくる性欲猿とは違うのだ。

逆に何をしたら欲情するのかわからないけれど。

そんな彼を狙うメスブタが現れてからでは遅いのだ。

彼は浮気するような真似をするとは思えないが、それとこれとは別である。

彼が拒絶をしないのを良いことに抱きついたり、頭を撫でさせたり……あ、そいつ殺す。

それは私のだ。

ドロリと、想像の中のメスブタ相手にすら濁った殺意が湧き出す。

私以外が触れる？

私以外のモノになる？

そんなことになったら私はきつと……。

”俺が守るから”

幾度となく聞いた彼の言葉が過る。

そうだ、あり得ない。

あり得ないよ。

彼が私を裏切るわけがない。

思考がつい危険な色に染まりそうになるが、彼という最高の男が私を見捨てるわけがないという確信が染まりかけた思考を落ち着かせてくれる。

「なんかニコニコしたり、真顔になったり忙しそうだけど、だいじよぶかー?」

考え込んでしまった私の顔の前で中学の頃からの友人である有達友理(ありたち ともり)、通称友ちゃんがひらひらと手を振って顔を覗き込んでくる。

見た目はギャルっぽいけれど良く相談に乗ってくれる一番仲がよい友人である。

「あ、ごめん。ちょっと幸せすぎて」

「うわー、こいつムカつくー」

わりとガチトーンである。

「どうかき、朝っぱらから何あれ。

当てつけ?」

下駄箱と校門前でイチャイチャイチャイチャイチャイチャイチャして殺意湧きそうだったんだけど」

あ、これ冗談抜きでイラツとしてる時の声だと察してしまう。

経験上、誤魔化そうとしても許してくれないだろう。

「今日さ……いろいろあって私のこと好きなの?」って聞いたんだけど……、そしたらアイツが好きって言うてくれて、私も好きって言うちやっ……て……そんな感じ?」

てへつと朝の幸せエピソードを正直に話す。

当然だが、自慢である。

「うっぎ」

この親友、本日は5割り増しで毒舌である。

「ひっびー」

いいじゃん!自慢させてよー!

アイツほんとにカッコよくてさ、今日もなんか危ない目に遭ったのを守ってくれただけじゃなくて、俺にとつてお前が一番大切な人だから守りたいって言うてくれてもう胸キュンすぎてキュン死にそうになったし、最近好きすぎて限界突破して心臓足りなくらいヤバイ」胸キュンすぎて多分すごい表情してるかもしれないけど、知つたこつちやない。

とりあえず、ここぞとばかりに周りに聞こえるように言うてどこにいるかもわからない彼を狙うメスブタたちへの牽制としてエピソードを披露しておいた。

あとで彼のクラスにも行ってアピールしまくらないと。

「めっちゃ、早口でウケる」

なんか友ちゃんの見線がめっちゃ冷たい。

その視線はまるでバカップルなんて死ねと言っているようですらあった。

「つか、アイツが果彌第一主義なのは中学の頃から変わらないじゃん。中学のときもすごかったけど、この前はマジで命張つて助けたらしいし、どれだけ好きならそこまでできるのかほんとに不思議なんですけど」

中学が同じということもあり、彼と友ちゃんも顔見知りであり、それなりの付き合いはある。

「前にも言ったことあるかもだけど、それ私もわからないだよー。以前に聞いたときは詳しくは教えてくれなかったけど私に助けてもらったからって言うてたんだけど、私は助けた覚え全然ないし、むしろ助けてもらった記憶しかないまである」

何度となくなぜ見返りもなく助けてくれるのかと聞いたことがあるが、彼は決まって助けてもらった恩を返したいだけと言いつつ、それ以上は何も言わず何も求めることはなかった。

身に覚えのない恩返しに幾度となく困惑して今でも時折不思議に思うほどである。

もし彼がその恩が勘違いだったと言つてその優しさを私に向けてくれなくなつてしまつたらと考えて恐怖を覚えた回数も数え切れな

い。

「鶴の恩返しかよ。」

「覚えがないなら人違いなんじゃ？」

「それも聞いたことあるけど、私で間違いないってさ」

仮に本当に何か助けたことがあったとしても今日まで助けてもらった回数を考えたら間違いなく恩返しは超過してこちらが返さなくてはいけなくらいであるが、彼にとってはまだ恩を返しきれていないようである。

本当に過去の私はどんな善行を行ったのかが気になって仕方がない。

「ふーん。でも、よかったじゃん。」

きっかけはどうあれ、両想いだったんでしょ？」

「うん」

「いやあ、ようやくくつついたかー」

高校からの連中はとづくに付き合ってるって思ってたっぽいけど、中学の頃のあいつ知ってる身としてはそもそもまともに感情あるのかすら疑わしかったかなー。」

ケラケラと笑う友ちゃん。

失礼すぎる物言いに文句を言いたかったが、中々に反論しにくいのが本音だった。

最近こそ良く笑うようになってくれたが、出会った頃は感情があるのかすら疑わしかったのは事実である。

「なんつーかさ……、アイツにも人並みの恋愛感情とか、性欲とかそういうのあったんだな」

仕方ないとは言え、散々な評価である。

中学の頃から女子の下着姿を見ても眉一つ動かさず、素直に見てしまったことを謝り、即座に上着をかけて気を遣ってくれるほどの紳士である。

というより、無関心すぎて逆に女子のプライドを傷つけるタイプだった。

内心は何を思っているかはわからないが、数えきれないほど胸を押

し当てたにも関わらず何も効果がなかったため、女としての自信を無くしかけたことすらあったのはいまだに忘れられない記憶であった。



## 10、その命の使い方

お前は機械のようだと最初に言いだしたのは果たして誰だっただろうか。

常に感情を殺して生きていた自分は周りから見ればさぞつまらない人間だったのだろう。

どこまでも機械的で面白みもない人間に一体誰が話しかけたいと思うだろうか。

次第に挨拶すらされなくなり、まるでそこに存在しないかのように扱われるようになったのは必然だったのだろう。

多感で感情豊かな年代である中学生たちにとって自分はきつと不気味で異端にしか映らなかったのだろう。

思春期特有の恋愛に対する興味も存在せず、異性に対する興味すら持てないが故に情緒や感性が健全に育つこともなかった。

だからこそ、彼女……因果彌（ちなみ かや）は不思議な存在だった。

「おはよ」

すれ違い様に挨拶をして去っていく。

「今日もトレーニング？」

「がんばるねー」

帰り道のあの場所で。

「あ、ちようどよかった。」

数学の教科書貸してくれない？」

学校の廊下で。

あの日、偶然知り合った彼女だけはいつだって話しかけてくれた。

無気力で、無表情で、無反応な機械のような自分を知ってなお何も変わらなかった。

そんな日々が続いていたあるとき、毎日の些細な僅かばかりの会話を楽しみに行っている自分に気づいてしまった。

彼女と会話ができない日を残念だと思う気持ちが芽生えていた。

気づけばただひたすらに与えられた役割をこなし、思考することを放棄したはずの頭の中に感情が混じり始める。

それはずっと己の中にありながらも目を逸らし続けてきた自分の本音だった。

感情がないから耐えられるなんて嘘だと。

何も考えなければ辛くないと思いつけて耐えてきた閉じ込められた感情の発露。

そうだ。

俺は本当は誰かに見てもらいたかったのだと、話しかけてほしかっただけだったのだと気づいてしまった。

家でも学校でも存在しないものと扱われてきた自分にとって、そのささやかな本当の願い、ただそれだけのことが最も欲しているものだった。

それを思い出したそのとき、涙が自然と溢れ出していた。

存在しないまま消えなくなかった。

そんな当たり前のことを思い出してしまった。

希望がないからといって死にたくなかったのはただ一つ、何も証を残せずに死ぬことが耐えられない。

こんなことすら忘れて心を閉じ込めていた。

どうしようもないほどの利己的でくだらない人間らしい欲望。

自分が一番嫌っていて、表に出したくなかったそれ。

どうして今更思い出すことができたかなど、考えるまでもなかった。

彼女だけが自分を認知し、人と同じように扱ってくれたから願いを取り戻せたのだ。

彼女にとってはなんとということはない些細で意識すらしないたったそれだけのことが俺にとって最も大切で、最も欲しかったものを取り戻させてくれた。

この湧き上がる気持ちはなんだろうか。

彼女のことを考えると胸が苦しくなり、嬉しくなって、彼女のために何かをしたくなる。

彼女が困っているならば助けてあげたい。

そのためならばこの命すらかけてもいいほどに。

「そうか、この気持ちか……」

”感謝”なんだなど、言葉にできない曖昧で複雑な感情が形になった気がした。

この恩を返さなくてはいけない。

”俺”を、束収護（つかね しゅうご）という一人の人間であることを取り戻させてくれた恩を返していこう。

もらったものが大きすぎてもしかしたら返し切れないかもしれないけれど、今なら言える。

この恩を返すためならば命すら懸けてやる。

どうせ彼女に出会っていなければどこか近い未来に擦り切れて死んでいた。

それは本来確定していたはずの未来。

なればこそ、どうせ死んでいた命にもとより価値など存在しない。ゆえにこの命の使いどころは一つしかなく、自分なんぞを救ってくれた素晴らしい少女のために使うことを決めた。

この日から何かが明確に変わったわけじゃない。

何かを大きく変えようとしたわけではないが、少しずつ周りに溶け込むことを意識できるようになった。

彼女の近くにいることが普通であるように。

誰よりも早く彼女を助けることができるように。

「何か良いことでもあった？」

「いや、特には」

気の持ちようが変わっただけとはいえ、最初に気づいたのはやはり彼女だった。

「ただ、キミのおかげですつと心に引つかかっていたことが解消できたからそのおかげかもしれないな」

「私、何かしたっけ？」

首を傾げて心当たりがないという様子の彼女を見て、それはそうだろうと思うだけで言葉には出さない。

彼女が何かしたというよりも彼女の行動と言葉に勝手に救われて勝手に恩を感じ、勝手に報いたいと思ってるだけでしかない。

「キミにとっては些細なことだったのかもしれないけど、俺は確かに救われたんだ。」

だから、いつかこの恩を返させてほしい」

「身に覚えのない恩返しっ!？」

オーバーリアクションの反応を見てやはり冗談だと思っているなと苦笑する。

それもそうか。

友達ですらないたまに話すだけの存在に急にこんなこと言われても困惑してしまうのは当然である。

「まあ、恩返しというのは大げさかもしれないけど、もし困ったことがあれば言っしてほしい。」

できる限り力になるよ」

全く大げさなつもりはないが、命をかけてなどと言われても重いだけなので控えめな言い方しておく。

「じゃあ、勉強教えて。」

たしか成績よかったよね？」

いきなり言われてたところで何もないだろうなと思っかけて言葉の返答は恐ろしく早かった。

割と声が本気である。

「成績めちやくちやばいんだけど、他のみんなに頼んでも私にはもう教えたくないって言われてどうしようかって思ってたんだよねー」

随分と軽い物言いではあるが、その実声は真剣そのものである。

どれほど切実なのかはわからないが、そのお願いはすぐにでも叶えられることもあり、少し安心する。

誇る気も起きない事情ではあるが、普段から他にやることもないのと、親に何も言われないために成績は上位をキープしているので学校の勉強程度であれば問題はない。

「了解した」

まずは些細なことから信頼を積み上げていこう。

いつか彼女に心から頼ってもらえるようにここから始めていこうと、誓いを刻む。

「やったー!」

「じゃあ、図書室でいいか?」

「おっけ、おっけ」

この喜びようはなんだろうと思いつつながら早速勉強するために場所を移すことを決める。

そして、俺は知る事となる。

彼女の言った、もう誰も教えてくれなくなったの本当の意味を……。

割と致命的な彼女の学力と、あまりの物覚えの酷さ、集中力のなさを知ってしまったことで今後でも継続して勉強を教え続けることになったのは言うまでもなく、その後毎日のように二人で図書室に通うのが日課となったのだった。

## EX1、在りし日の恩返し①

勉強を教える。

たったこれだけのことが何よりも難しいことであることを初めて知った。

教師というのはこんなにも難しいことを大勢に施しているのだから、プロフェッショナルというのはすごいと思う。

特に自分のような対人経験が薄いものにとってコミュニケーションを必須とするこの行為そのものの難易度が高いのかもしれない。

「せんせー、全くわかりません！」

現に俺は早速どうしたらいいのかわからなくなっている。

開始してまだ20分も経っていないのだが、どうするべきかを考えなくてはならない。

まずは得意科目を分析するために、主要5教科の次回テスト範囲の問題を簡単などころから順に少しずつレベルを上げて現在の学力がどの程度であるかを測ろうとした。

そう、測ろうとしたのだ。

自分の考えは決して間違っていないかった。

理解度を確認し、理解を深めていくやり方が間違えているとは思えない。

しかし、どうして全教科一問も解けていないのだろうか。

正直に言えば、彼女のいう友人達がもう教えたくないと言っていたという言葉を舐めていた。

「……までは……」

思わずこぼれ落ちる言葉。

「ごめん、ほんと勉強苦手でどうしたらいいかわかんないんだ」

しょんぼりと視線を落とす姿を見て、そんな顔をさせるために彼女の助けになろうとしたわけじゃないと己に言い聞かせる。

むしろ、ここで彼女の学力を向上させてこそ恩返しになるのだと前

向きに考えることにした。

「大丈夫。」

少しずつでもいいからやろう。

俺が絶対なんとかさせるから」

心が折れないように半分自分に言い聞かせるように言う。

「ありがとう!!」

束くん、マジ神様!そう言ってくれた人初めてだよー」

こちらの手を握り、拝むように笑顔を向けてくるのはいいが、妙に距離が近い。

ここまで異性に無防備だと少々心配になってしまう。

「中一の序盤の内容からこれってことは多分基礎ができてないんだと思う。」

だから、しばらくは中一の範囲から少しずつ進めて基礎を固めていけば、次の期末くらいには結果が出てくると思う」

流石に次の中間までに一定ラインまで持ってくるのは無理だと判断し、中間を越えた後の期末にこそ勝負をかけよう。

この日から彼女との勉強習慣は始まった。

彼女の偏差値向上プランは難解を極めたが、言い出したからには助けになれるように必死にがんばった。

数学は基礎の計算問題を反復練習して計算そのものを慣れさせ、苦手意識を払拭させる。

国語は致命的なまでの読解力のなさを改善させるために児童向けの本から少しずつ読ませ、文章そのものに慣れると同時に漢字を読むことから馴染ませる。

社会や理科のような暗記に比重を置く科目は学力に合わせて暗記用の資料を自作してやらせ、息抜きと称して有名どころの歴史は漫画で読ませた。

英語は文法そのものに対する国語力がないこともあり、苦肉の策としてとりあえず文法は無視し、力業だが英単語を覚えさせることに注力させる。

毎日ひたすら何時間もそれを繰り返し、繰り返し図書室で勉強を続

ける。

勉強が苦手で何をしたらいいかすらもわかっていなかった彼女にとっては苦痛の日々でしかなかっただろう。

何度も泣き言を言っただけで今日はもうやめようと言っただけでも、明日からはもうやらないとは一度も言うことはなかった。

そして、辛いのであればいつでも逃げられるにも関わらず、彼女は一度たりとも図書室での勉強から逃げたりはしなかったのは賞賛に値した。

「なんでそこまでしてくれるの?」

あるとき彼女は言った。

「何がだ?」

読んでいた本から顔を上げて問い返せば、そこには吸い込まれるような瞳でじっとこちらを見ている彼女がいた。

「本当に毎日勉強見てくれてるよね。」

それこそ休みの日だっただけで見てくれることあるけど、どうして私のためにこんな優しくしてくれるの?」

「優しくしてるわけじゃない。」

これはただの恩返しだから、キミは気にしなくていい」

以前にも告げた事実だけを口にし、再び手にした本の文字を追う。

「恩返しかあ……私は束くんにここまでしてもらえるほどのことをしたのかな?」

「ああ、返しきれないほどの恩だ。」

この程度で返し切れるとは思っていないから、気にしなくていい」  
今度は視線すら向けず、文字を追ったまま答えた。

「でも……」

なおも言い募ろうとした彼女の言葉を遮るように小さく息を吐き、本を閉じる。

「俺のことが迷惑だと言うのであれば遠回しに言わずに、はっきりとそう言ってくれて構わない。」

俺はキミの迷惑にはなりたくない」



なぜ彼女がここまで納得しようとしなのかが理解できなかった。彼女自身が勉強を教えてほしいと言い、自分はそれに全力で応えて、その結果は表れてきている。

彼女は利用できるものを使って学力を上げ、俺は恩を返すことができる。

それだけのことに異論を挟む余地などないはずである。

「違うよ！」

そうじゃなくて！

こつちばかりいつも迷惑かけてばかりで気まずいというか、友ちゃんたちもそいつはお前に気があるんじゃないかとかごによごに言ってたし……」

尻すぼみに言葉が小さくなっていくが、何となく彼女が言いたかったことが理解できた。

「何度も言うけれど、これは恩返しだと思っているので俺は迷惑に思っではないない。

それと、キミの友達が言っている気があるというのが異性に対しての好意を示す言葉であるのだとすれば、その心配はないから安心してほしい」

考えてみれば異性と二人きりで図書室に通い詰めるというのは年頃としては配慮が足りなかったのかもしれない。

事ここに至るまで思いつけないとは、やはり自分は社会性というものが欠けているのかもしれない。

「がーん！めっちゃ直球に興味ないって言われた!？」

別にいいんだけど、なんかすごい複雑っ！」

「その反応の意図はよくわからないけど、もし俺の言葉が信用ならなのであればここに誰か連れてきても構わない。

もちろん、勉強の邪魔にならない事は前提条件とさせてもらうが」今に始まったことではないが、やはり彼女の反応はよくわからない。

結局のところ、何が言いたかったのか。

自分の考え方が常人とは少しズレていることは自覚している。

それゆえにこれ以上の発言は余計な火種を生み出しかねないとして口をつぐむ。

「違うのよー……」。

そういうこと言いたかったんじゃないのよー……でも、なんかもう気にしたら負けな気がしてきた……」

「気にしないのであればそれでいい。」

じゃあ、続きから再開してくれ」

泣きそうな声に聞こえなくもなかったが、表情は落ち込んでいる感じでもないで彼女の言う通りに気にしないことにする。

これも女心というものなのだろうか。

いつか理解できるといいのだがと思うのだった。

## 11、油断ダメ絶対

終了のチャイムが鳴ると同時にガラリと教室のドアが開いて二人の女子が現れる。

「邪魔すんぞー」

そちらに視線を向けてみると、入ってきたのは彼女と有達だった。有達は因果彌の親友とも言える存在であり、自身にとつても重要ともいえる存在ではあるのだが、正直に言えば少し苦手であった。

「お前までくるのは珍しいな」

互いになんとなく反りが合わないのはわかっているため果彌が自分に会いにくる際に有達までついてくるのは稀である。

「こいつがいつも以上に浮かれてボケまくってるから、こっちはどんな顔してるのか気になって見にきた」

どうやら、今朝からの彼女の不思議なテンションは有達にとつても普通のものではないらしい。

「そうか」

普通ならここで会話を繋げるかもしれないが、有達との会話は一言で終わる。

いつも通りであった。

「相変わらず、愛想のカケラもないやつ」

「お前の言動ほどじゃない」

可愛い顔してその乱暴な言動は相変わらずである。

「は？喧嘩売ってんの？」

「いや、可愛いのは外見だけで言動は相変わらずだと思ったただけだ」

口調が乱暴なのはどうでもいいが、何かとこつちに敵意を向けるのはどうにかしろと突っ込みたくなるのは無駄なのでやめておく。

「ふあつく。すぐそういうこと言うからタチ悪いんだよなコイツ」

有達はわずかに恥ずかしそうに顔を逸らして舌打ちする。

言動とギャルっぽい見た目の割には容姿を褒められるのに慣れて

ないのも相変わらずであり、喧嘩腰になられた時はとりあえず褒めておけば怯むのも変わっていないようだ。

全く興味はないが、一般的な容姿の美醜くらいはわかるつもりであるので、見た目の良きで言動の損は相殺されているんだらうなと思ってしまう。

「ねー、寂しかったよー」

かまってるーと、周囲に見せつけるように膝の上に乗って抱きついてくる。

なんか強引に会話に割り込んできたような気がしたが、気のせいだろう。

「なにかあったか?」

これまでの経験上、ここまで露骨に教室内で甘えてきたことはないため、自分の知らない数時間の間に何かあったのかと有達に問う。

「どう考えてもお前のせいだろ」

呆れた口調で返されるが、身に覚えがないことを言われてもどう答えればいいのかわからない。

「はー、生き返るー」

ふにやふにやと膝の上に乗って腰に手を回して抱きついたら何か生き返るのだろうか。

正直よくわからないが、楽しそうなのを邪魔したくないので黙っておく。

「で、怪我の方はどうなの?」

「不幸中の幸いなことに内臓の一部以外はそこまで重症というほどではなかったからな」

隠すまでもないため、正直に告げる。

骨折はほぼ完治し、激しい運動をしなければ問題はない。

内臓の一部が破裂し、開腹手術となったところはまだ完全に完治しておらずしばらくは投薬による治療と経過観察が必要だと言われているが、日常生活には支障はない。

「内臓の一部って、あんたそれ痛くないの?」

指差されたそれとは、手術してまだ間もない胸部に抱きついている

彼女のことである。

「少し」

痛いかわくなくないかといえば、正直に言えば痛い。

しかし、これも彼女を救うことができた痛みだと思えば安いものである。

「ああ、もう！ほんつとに！甘やかすすぎ！」

「うひゃあー！」

有達が言葉と共に抱きついていて彼女の制服の襟を掴んで強引に引き剥がす。

「こいつは言わなきゃわからないポンコツなんだから、まだ治り切っていないなら治ってないってちゃんと言い聞かせなさいよ」

「え？うそ！」

痛かったの？」

彼女の顔からサツと血の気が引いたように戸惑いと焦りが浮かぶ。

「大丈夫だよ。」

少しだけだし、キミがそうやって甘えてくれるのがうれしくて俺が言いたくなかっただけだから」

心配そうに泣きそうになっている彼女の頭を優しく撫でる。

そうやって俺を必要としてくれていることが何よりもうれしいということを引きつと彼女も理解してないんだらうなど、苦笑してしま

う。

「うつつくうう……録音して毎日聴きたい……」

プルプル震えて小さく呻いているが、最近の彼女はやはり何か様子がおかしい。

「有達、果彌が最近変なんだが」

「前から大して変わんねーよ」

親友の有達がいうのであれば間違いはないのだろうが、果たして前からこんなだったかと首を傾げてしまう。

「それに……!?!」

言葉が続けようとした瞬間、小さく地震が発生する。

日本人らしく、この程度の地震では驚くことも反応することもない

が、嫌な予感に背筋にぞくりと粟立つ。

事故に遭ってから嫌と言うほど味わったこの嫌な予感。

些細なことから始まるきっかけを見逃すなど視覚、聴覚、感覚を駆使して見つけるために集中する。

頭上からわずかに聞こえたガチャと何かが外れる音。

何がとは考えない。

見上げるなどの無駄な一切の動作は排除。

理由や、何が起きるかは考えずに最適解を頭で考えるのではなく、生存本能によって身体が動いていた。

巻き込まれないように近くに立つ有達を軽く押して数歩下がらせる。

膝の上にいる果彌を遠ざけるのは不可能だと判断して頭を抱きかかえて覆いかぶさるように身体を丸める。

せめてもの抵抗として片手は後頭部に回して少しでも頭部への衝撃を減らせるように準備をする。

ガシャーンと、大きくガラスが割れるような音と同時に後頭部と背中から伝わる衝撃にわずかに苦鳴を漏らす。

一瞬、静まり返る教室内。

「きやああああ!!」

瞬間、誰かがあげた悲鳴を皮切りに教室が一気に騒がしくなる。

頭がグラグラする。

何が起きたかわからないが、まだ油断はしない。

この一撃で終わるならそれで良いが、そうじゃないなら……。

彼女を抱きしめる力をさらに込める。

「おい、束！大丈夫か！」

かけられた声が遠い。

ドロリと、頭部からぬるりとした血が滴る感覚。

どうやら頭部のどこかを切ったらしい。

「しゅう……くん？」

抱きしめた腕の中からくぐもった声が聞こえてくる。

嗚呼、無事でよかった。

数秒待っても追撃は来ない。

もう大丈夫だろう。

落ちてきたのはおそらくLED照明だろう。

車に轢かれるよかマシンだなど思えるあたりはまだ余裕はあるともいえる。

しかし、まさか1日に2回も因果の収束が来るとは思いもしなかった。

これは完全に思い込みによる油断だった。

勝手に一日一回と思い込んでこのザマとは笑えない。

しかし、考える力が残っていたのはそこまでだった。

「有達、あとは頼んだ」

揺れる視界の中で驚きのあまり固まっている有達を見つけて告げる。

親友である有達ならば問題ないと、ギリギリで保っていた意識を落とすのだった。

## 12、知らないものは理解できない

目が覚めたら見慣れた光景だった。

この白い天井と飾り気のないベッドは間違いなく病院だろうとすぐにわかった。

「生きてたか」

覚えてる最後の記憶は落下物が頭部に落ちたことによる強い衝撃。そこから先何があったかは全く思い出せない。

だが、一番大事な彼女に怪我がなかったことはかろうじて覚えていたので問題はない。

おそらくは気絶した自分を救急車で搬送したといったところだろうが、なんとも悪運が強い。

まずは目覚めたことを知らせようとナースコールを押下し、ベッドに体を預ける。

しかし、日に2回の死の因果の収束があるとは思いつかなかった。

朝と昼の2回もくるとは死の因果さんも随分と働き者である。

反対に何も起きない日もあるので法則があるという考えは頭から消した方が良くのかもしれない。

「どう対策すべきか……」

そもそもどう対策しろというんだと、理性が突っ込む。

この際、防弾チョッキでも常に着込んでおくべきだろうか。

いや、この場合は防刃の方が良いのだろうか。

日本で銃弾が飛んでくるのは余程の事態であろうし、おそらくは刃物が飛んできたり、通り魔に襲われる確率の方が高い。

ちよつと密林通販で防刃ベストを注文しておこうと心に決める。

備えあれば憂いなしだろう。

ガチャリと扉が開く音に看護師が来たかなと目を向ければそこにいたのは果彌であった。

「うわああああああん!!」

しゅうううくーん!!!」



こちらの無事の姿を確認できたからか、目を大きく見開きボロボロと涙をこぼしながら叫ぶようにしてこちらに走ってくる。

「ここ病院だから静かにしたほうがいいぞ」

「ごめんなさい。本当にごめんなさい……また私を庇って怪我させちゃってごめんなさい……」

こちらのツツコミなど聞こえていないのか、手を握って何度もごめんなさいと謝り続ける。

「お前のせいじゃない。」

ちよつと運が悪かっただけだ」

きつとこう言っても無駄なんだろうということはおわかる。

短期間に何度も自分を庇って友人が死にかけたという事実は、優しい彼女にとっては耐え難い事実として重くのしかかっていることだろう。

「でも、私さえいなければ……!?!」

それ以上の言葉を聞きたくないと思い、指で彼女の口を塞ぐ。

「自分がいなかったらなんて言わないで欲しい。」

キミがいなければ俺には生きている意味なんてないんだから」

優しく微笑んで頭を撫でれば、再びわんわん泣き出す果彌。

そして、とりあえずは泣かせておこうと決め、扉の近くでとても気まずそうに立っている看護師さんを見やる。

「こちらから呼び出したのに待たせてしまってすみません」

「いえ、大丈夫です」

プロとしての意識ゆえか、努めて冷静に診察を開始しようとしているが、その表情はとも何とも言えないものをしている。

にやけそうになるのを必死に堪えているというのが正しい表現だろうか。

搬送患者が意識を取り戻して呼ばれたと思って来てみたら、そこには女子高生が泣きながら患者に縋っているのはさすがに想定外がすぎるだろうから、その表情になるのもわからなくはない。

現在の健康状態を確認するための質疑応答もその表情のせいでも複雑な気持ちにさせられてしまった。

「意識の状態も問題なさそうですね。

脳震盪による意識消失による搬送でしたが、CTで見ても異常は見られなかったですし、一時的な記憶障害や、意識の混濁もないようなのですぐに退院できると思います。

数日は様子を見て、突然気分が悪くなったり、頭が痛いなど違和感があったりしたらすぐに病院に来てください」

「ありがとうございます」

この程度で済んだのは咄嗟に手のひらで後頭部を守れたのも大きいだろう。

おかげで左手は打撲によってしばらくはまともに動かせそうになりが、死ぬのに比べれば大したことはなかった。

まさか以前に登山ガイドに習った咄嗟に熊に襲われた際のやり過ぎ方講座が役に立つ日が来るとは思いもしなかった。

何事もやっておいて損はないのだと実感している。

「こんなこと言うのもなんだけど、あまり無茶しないでくださいね。

2回とも事故とは聞いてますけど、彼女さんあまり泣かせないであげてください」

困ったようにちらりと、まだ鼻を鳴らして涙目でこちらを見ている彼女を見る。

また涙で化粧がぐちゃぐちゃになってすごいことになっている。

相変わらずこういうところはポンコツのまんまだなとわずかに笑みがかぼれてしまう。

「はい、気をつけます」

と言いつつも、気をつけてどうにかなるものでもない。

一つ気になるのは今日の入院費とか、諸々の手続きについてである。

前回に続き、短期間で何度も入院となるとあの親がそろそろ面倒をかけるなど怒りそうだった。

慰謝料で入院費などは一切かかってないが、手続きやら話し合いやらをしたであろうことを考えるとあの親たちに変な借りを作ってしまったのは非常によくはない。

特に今回は加害者がいないからどうなるのだろうか。

状況的に設備の不備ということでは学校責任となり、治療費を請求できると信じていたのだが、果たしてあの親たちは動いてくれるのか。

それとなく治療費については担任教師にでも聞いてみようと思っ  
た。

もしも治療費が一切でない、出さない自分ではどうにかしろと言われ  
たら過去の病院内で起きた過失事故を見逃した借りをチャラにする  
という最終手段を切るしかないだろう。

残念ながら学生の自分には金などないのだ。

先にいろいろ確認しておかないと後が怖い。

どうするべきかと考えていると看護師と入れ替わるように一人の  
女性が入ってくる。

「こんにちは、収護くん」

穏やかな表情を浮かべる女性に挨拶を会釈する。

「ママー」

彼女が母親の存在に気づいて駆け寄っていく。

「あらら、涙でお化粧ぐちゃぐちゃになってるわよー。そのままじゃ  
収護くんに嫌われちゃうから直してきなさい」

「でも……うん……」

優しくも諭すようなやり取りだけで、彼女を簡単に納得させること  
ができるのはさすが親子だと思ってしまう。

自分ならまずこうも簡単にはいかない。

「また娘を守ってください、ありがとうございました」

彼女が病室を出て行くと同時に彼女の母は深く頭を下げる。

「お礼なんて必要ありません。」

自分が望んだことです」

このやり取りも一度目の交通事故の時と合わせて2回目となるが、  
同じようにお礼など不要なのだと言首を小さく振る。

「仮にそうであったとしても、親として娘を危険から守ってくれた方  
へのお礼をしないなんてありえませんか」

なんて出来た人だろうか。

我が親に見習わせたいものである。

逆の立場の場合、我が親ならばそいつを庇う価値なんてないとか、まだ死んでなかったのかくらい平気で言いそうである。

いや、うちの親たちは基本小物で小賢しいところがあるので、直接的な物言いはせずに内心だけにとどめておく可能性も高い。

どちらにしてもまともなものじゃない。

「いえ、自分はあなたの娘さんに返しきれない恩があります。

その恩に比べたらこの程度のことは大したことはありません」

もはや、何度となく言った言葉であり、以前にも目の前の女性にも伝えことのある言葉であった。

「娘を助けてもらった私の立場で言える言葉ではないけれど、貴方はもつと自分を大切にしたいの」

困ったかのような、悲しみのような複雑な色を含んだ表情。

まるで泣いてしまう前のような表情は彼女そっくりで、親子なんだなと思った。

「大丈夫ですよ。

私が死んだところで誰も悲しみませんから」

それは心からの言葉だった。

もしかしたら、彼女は悲しむかもしれないが、それも一過性のものだろう。

いつか悲しみを乗り越えて幸せになってくれる。

彼女を幸せにするのは自分ではないのだ。

「……娘も私も悲しみます」

歯を食いしばるかのような何かを耐えたような声だった。

その瞳からは涙が溢れて、頬を伝っている。

大人が泣くのを見たのは初めてだった。

優しい人は苦手だ。

どうしたらいいかわからなくなる。

「お優しいんですね」

自分の知る親とは本当に違う。

他人の子に涙すら流せる方だからこそ、彼女もあんなにも優しく

育ったのだろう。

「あの子が本当に悲しまないと思ってるの？」

「いいえ、きつと悲しむと思います。」

「だけど、彼女が死んだらもつと多くの人が悲しんで嘆くでしょうから……」

彼女の母の震える声に対し、自分の声は驚くほどに平静だった。

悲しむ人が少ない方がいいなどと、気取ったことを言う気はない。

だが、言えるのは何も役に立たない自分などより、彼女はもつと生きるべき人間だということ。

それだけは揺るがないたった一つの真理だった。

「すみません。」

変なことを言いました。

でも、自分も死にたいわけではないですからできる限り無理はしないようにします」

少々喋りすぎてしまったことを後悔してフオローを入れる。

死にたいわけじゃないなどとどの口が言うのか。

そのためだけに生きていたくせに平気で嘘を吐く汚さに反吐が出そうだった。

しかし、どうにも調子が狂ってしまう。

これだから優しい人は苦手なのだ。

つい口が軽くなってしまい、これまで誰にも言ったことがない本音の一部をつい口にしてしまった。

「ええ、無理だけはしないでね。」

あなたにはいつか娘をもらってもらわなきゃいけないんだから」

にこりと笑顔を浮かべながら、とてもよくわからないことを言われてしまう。

「またぐ冗談を……」

ははは……と、乾いた笑みがこぼれ、釣られるように彼女の母も上品に笑う。

その笑顔の応酬は果彌が戻るまで続くのだった。

## EX2、在りし日の恩返し②

「お前か？果彌に世話焼いてるやつって」

放課後になり、いつものように図書室に向かおうとすると、見慣れない女子が声をかけてきた。

「世話を焼いているというのにはわからないが、勉強を教えているというのであれば俺のことだろうな」

一瞬誰のことかわからなかったが、因さんの下の名前はたしか果彌だったなと思い出して回答を返す。

「なんでそんなことしてるの？」

目つきを鋭くして睨みつけるように問う。

言葉遣いからもわかるが、どうやら随分と警戒されているようである。

「前に助けてもらったことがあるから、その恩を返したい。

聞きたいことはそれだけか？」

正直に答えてさっさと会話を終わらせて図書室に向かいたかった。彼女の学力向上カリキュラムはまだ結果が出ていない。

少しでも時間を効率的に使いたかった。

「へー、じゃあ私もついていっていいか？」

「邪魔しないのであれば構わない」

頷き、二人並んで図書室へと向かう。

「あ、きたきた！」

「今日も勉強するよー！」

「って、友ちゃんじゃん！どうしたのー？」

こちらを見つけて駆け寄ってくる彼女のテンションの高さに圧倒されそうになるが、表情には出さない。

「あの果彌に勉強を教えるっていうから、どんな勉強してるか気になったから見に来てみたのよ」

「めちやくちや失礼なこと言われてる気がする」

含むところたつぷりの物言いに彼女はため息混じりに息を吐く。

「時間ももつたないから始めよう。」

昨日までに学習した数学の続きからになるけど、中一の中盤から後半までの計算問題を作ってきたからこれをやって欲しい」

カバンを漁り、15枚ほどの紙束を取り出して果彌に手渡す。

「はーい……」

げんなりとした元氣のない返事だが、嫌だとは言わないいつもの彼女である。

「今回は少しやりやすいように問題は作ったから、まずは頑張ってみて欲しい」

計算をするにしても公式に慣れさせることを念頭においた現段階の彼女の学力に合わせた手作りの問題集である。

これまでの経験からつまづくところはわかかってきているので、細かいところに解説や解法をわかりやすく書いておいた。

「わかったー！わからなくなったなら聞くね！」

早速問題に取り掛かる彼女の手元を友ちゃんと呼ばれた女子が覗き込む。

「うわ、すげ……なにこれ書き込みえっぐ！」

「ねー！すごいよね！」

これ全部束くんが作ってくれてるんだよ！」

思わず呟いた言葉に反応して手を止める果彌。

「勉強の邪魔をするなら出て行って欲しい。」

何か気になることがあるなら俺が答えるから、因さんは問題を進めてくれ」

ただでさえ期末まで時間がないのだ。

まだ今の授業のところまで進んですらいらないのに立ち止まってもらっては非常に困る。

「はーい」

「あ、邪魔してごめん」

返事をして再び問題に取り掛かる彼女に、素直に謝り静かに離れてこちらにくる。

「あれっってお前が作ったの？」

「問題についてならそうだな」

勉強をしている彼女の邪魔をしないように声を潜めて互いに声を出す。

「なんで果彌のためにそこまでするの？」

あの子はあんまり理解してなさそうだけど、あの問題作るのに相当時間かかっているのなんて見ればわかるし」

「勉強を教えて欲しいと頼まれたからだ」

恩返しであって、何がして欲しいかと聞いて返された願いがそれだからにすぎない。

「好きなの？」

「好きというのが、恋愛的な好意を示しているのだとしたら違うと言おう」

この年代の女子はすぐに恋愛などに繋げようとするとか何かで聞いたが、どうやら本当のようである。

「へー……なるほどね。」

あんたはこういうやつなんだね」

口元を歪めて何かに納得を示しているが、特に興味もないので反応することはない。

「あんたは大丈夫そうだからいいや。」

一応自己紹介しとく。

私は有達友理。仲良くすることはないだろうけどよろしく」

「俺は束収護。よろしく」

彼女も仲良くする気ないと言っているのでお言葉に甘えて最低限の自己紹介しておく。

彼女の友達とあればあまり無碍に扱うのも良くないと判断したゆえであった。

「あいつさ、ポンコツだけどすごい純粋なやつだから泣かせないでよね」

その瞳は唸りながら問題を必死に解く彼女を見て、自分に向けられた視線とは違うとても柔らかいものであった。

「泣かせるつもりはないし、さつきも言った通りただの恩返しだ」



「それならいいけどさ」  
それを最後に有達からの言葉は途切れ、図書室には静寂が戻るの  
だった。

### 13、命の価値観

天井から照明器具が落ちてきた。

それに気づき、危ないと思う前に誰かに胸を押されて尻餅をついていた。

そして、尻餅をついた自分の目の前に落下した照明器具と、それを背中で受け止めた束の姿があった。

「え？」

呆然と真拔けな声がこぼれ落ちる。

そして、誰かに押されていなければ自分の頭部に落下していたかもしれないと気づき、全身から冷や汗が溢れ出し、身体が震えてしまう。誰かじゃない。

束のやつが押して助けてくれたのだ。

その事実が遅れて気づく。

教室から響き渡る悲鳴。

頭から血を流し、ゆっくりと起き上がった彼の体の下には怪我一つない親友の姿があった。

「有達、あとは頼んだ」

恐怖で身体が動かず、呆然としたままの自分と視線を合わせ告げた言葉にようやく現実感が戻る。

その言葉が最後の力だったのか、ふらりと意識を失い床に倒れそうになった束をなんとか抱き止める。

「おい！誰か救急車！！」

保健の先生呼んでこい！！」

制服に血がつくのも構わず必死に叫ぶ。

何が”あとは頼んだ”だ。

ふざけんな。

また果彌を泣かせるつもりか。

「誰か手伝え！」

頭を打ってるから衝撃与えないようにしてゆっくり寝かすぞ！」

男子を一人で支えるのは厳しいが、必死に支えながら助力を求め  
る。

近くにいる連中を呼び寄せ、なんとか意識を失った体をゆっくりと  
床へと横たえる。

その際に制服の上着を脱いで床と頭の間差し込んでおくことも  
忘れない。

頭部からの出血は既に止まっているようにも見えるが、医療知識に  
乏しい自分ではこの後どうしたらいいのかわからない。

下手に触って悪化させてしまったらどうしようという不安が胸の  
中をジクジクと締め付ける。

後は頼んだと言った意味を考えろ。

あいつは加減を知らない馬鹿だけど、頭は悪くない。

意識を失った私を治せなどそういう意味ではない。

そう、私に頼んだ理由は一つしかない。

「果彌！

あんたは怪我はない!？」

いくらあいつが庇ったとはいえ、怪我がないとは限らない。

「う、うん……、で、でもしゅうくんが……」

血の気が引いて顔は真っ青になり、手足が目に見えるほど震えてい  
る。

あいつが車に轢かれて意識不明になった時と同じだ。

せつかく治っていたトラウマが目の前で庇われたことよって再

発している。

むかつくけど、あとは頼んだの意味がよくわかるよ。

自分がやばいってときに他人のことを考えてフオローを頼めると

か、自分のことを度外視してなければ完璧だよ。

果彌のことなければ惚れてたくらい良い奴だと思う。

だけど、それ以上にお前のやり方には恐怖を覚えるよ。

「大丈夫。大丈夫だから。」

あいつは生きてるし、たいした怪我じゃないよ」

嘘でも言い聞かせなければならぬ。

あいつがどういう状態なのかは素人の私では何もわからない。だけど、今は嘘をつく。

まともに喋ることすらできないほどに震えている果彌を抱きしめながら、意識を失ったまま駆けつけてきた保健医に処置を受けている束に目を向ける。

お前はなんなんだ。

交通事故から果彌を庇ったと聞いた時はすごいと思ったし、無事だったからこそよくやったと思った。

だけど、目の前で見たからこそ、もうそんなようには思えない。私と果彌を助けて後のことは気にしない。

自分がいなくなった影響なんてまるでないと思っている。

ふざけんな。

感謝と同時に怒りが湧いた。

お前の果彌を守りたいって気持ちはその程度なのか。命を助けて心は他人任せ。

腕の中で震える親友を二回も助けてもらって私は心からあいつに感謝しているし、こいつなら果彌を任せてもいいってとつくに認めている。

だけど、そうじゃないだろう。

昔から他人の気持ちかわからない奴だとは思っていた。

度々言っていた恩返しという言葉。

その本質をようやく本当の意味で理解した。

こいつはきつと、文字通り命をかけて恩を返すことを正しいと思っている。

そうすれば果彌が幸せになれると本気で思っている。

これは怒りだ。

助けてもらった感謝を上回るほどの怒りが湧く。

救急車のサイレンの音が止まり、救急隊員が担架を持って駆け込んでくる。

「死んだら絶対許さないから」

意識を失い、搬送されていく束に告げる。

聞こえていないことはわかっている。  
それでもなお、言わずにはいられなかった。

## 14、死んだら絶対に許さない

コンコンと扉を叩き、どうぞという声を聞いて病室の扉を開ける。数日は入院と聞いた私は彼と話をするために一人で東のお見舞いに来ていた。

「よお、元気してるか？」

努めて普通にしようとしたが、口調はいつも通りでもその声はいつもと違った緊張を含んだものであった。

「有達か……おかげさまでなんとか。」

倒れたあと保険医や救急車呼んでくれたって聞いた。

ありがとう」

軽く頭を下げる姿に、立場が逆だろうと突っ込みたくなる。

「それはこっちのセリフ。」

あんたが突き飛ばしてくれなかったらこっちが下手したら死んでたんだから、感謝するのは私の方だよ」

「お前が怪我をすると果彌が悲しむからな」

今、何かとても間違えてないけどおかしなことを言われた気がする。

「それどういうこと？」

果彌が悲しまなければあんたは怪我してもいいってこと？」

以前からずっと不思議に思っていたことがあった。

こいつはどんな時もあり得ないほどに果彌を優先しすぎている。

惚れた弱みとも違う、以前よりどこことなく覚えていた違和感。

「そうだな……あいつが無事であればそれでいい。」

俺が代わりになれるなら何も問題はないよ」

質問に答えたようでいて、本質は全く答えようとしていない。

だからだろうか、歪さに当てられたように気づけばおかしな質問がこぼれ落ちていた。

「あんたさ……、もしかして果彌を助けるためなら自分が死んでもいいとか思ってた？」

「ああ、それがどうかしたか？」

半分あり得ないと思つて問いかけた言葉はあつさりど、まるでどうでもいいことを聞かれたかのように何気ない口調で返ってくる。

「ふざけんな!!」

気づいたら胸ぐらを掴み、怒鳴りつけていた。

「それどう言う意味かわかつてんの!？」

あなたは果彌がただけあなたのことを想っているか全然理解してないでしょ!？」

感情が爆発して制御ができない。

仮にも自分の命も助けてもらった相手にするようなことではないとわかっている。

本当はこんなことを言いたいわけじゃない。

だけど、どうしてかきつと今言わなきゃ後悔すると思つた。

果彌には絶対にできない。

私が言わなきゃいけないと震えそうになる声と、泣き出しそうになる涙腺をグツと堪える。

こんな悲しいことなんて聞きたくなかつた。

こんなの果彌に聞かせたくない。

本当にこの馬鹿はどうしてこんなにも……。

「彼女なら俺がいなくても大丈夫だ。

一時的には悲しむかもしれないけど、俺のことなんてすぐに忘れて幸せになれる」

「……っーぎざっけんなよ……」

ぎしりと歯が軋むほどに歯を食いしばって衝動的に殴りそうになつた手を止める。

「……」

手を上げて殴られようとしても動揺すら見せずにじつとこちらを見る無機質な瞳。

本当に気に食わない。

「あんたが怪我人じゃなかったらぶん殴つてた」  
頭に血が上っているのがわかる。

かつてこれほど怒りを抱いたことがあるだろうか。  
どうして。

どうしてここまで想われていてなおこんなことが言えるのかわからない。

誰から見ても果彌は東が好きだとわかる。

果彌にとつて東は誰よりも大切な人だとわかるはずだ。

あれほどにまっすぐに想いを寄せられてなおわからないというのか。

「すまない。」

俺はお前がなぜ怒っているのかわからない」

わからないってなんだ。

どうしてわからない。

お前は どうして そうなんだ という言葉を必死に飲み込む。

私は彼を罵倒してきたのではない。

彼に礼を言い、考えを聞きたくてきたのだ。

冷静になれと、己に言い聞かせる。

「約束して。」

絶対に死んでもいいなんて思わないって」

「約束はできない。」

また同じようなことが起きるなら、間違いなく俺は同じように動くと思う」

「わかってるわよ。」

あんたがそういうやつだったのはもうとつくにわかってるのよ。

でも、それでも何度だって言わせてもらおうわ」

胸ぐらを掴んだまま顔を引き寄せ、目と目を合わせて告げる。

「死んだら絶対に許さない」

「約束できない」

それでも答えは変わらない。

それなら、こちらにも考えがある。

「あつそ、じゃあ、私はあんたが死んだら果彌の親友をやめて、あの子を慰めてやらないわ。」



それで果彌が落ち込んで自殺するかもしれないけど、それも止めないから。

それでも、あんたは安心して死ねるの？」  
嘘だ。

親友を辞められるわけがないし、自殺しそうになったら全力で止めてどんな手を使っても立ち直らせてみせるだろう。

それでも、この嘘をこいつには本当だと思わせなければならぬ。

「……それは困るな」

ポツリと本当に困ったように束はこぼす。

「困るってどうして？」

なんで困るの？」

私はコイツを変えてあげなきゃいけない。

傲慢かもしれないけど、こいつの本質に気づいてしまった人間としてこのまま見ているだけなんてできない。

「果彌を慰めることができるのは多分友達だけだから」

それはそうだろう。

付き合いが長いだけあってよくわかっている。

あの子は友達が多いけど、悲しいことがあったときに寄り添えて、気持ちと共有できるのはきつとあの子の両親か私くらいだろう。

そこまで人間関係を把握してるのに自分が入っていない。

この歪さが束 収護という男の根幹に関わる重要なところのような気がした。

「なら、あんたは意地でも死ねないわね」

ガチガチに縛り付けて死ぬなんて思えなくなればいい。

「それにね、私はあんたに死んでほしくないって思ってる。

あんたが死んじやったらきつと泣くし、多分立ち直れないと思う」

わずかでもこいつを縛る鎖になればいいと本音を口にする。

悔しいけど、こいつはもう私にとっても大切な友達なのだ。

「どうしてだ？」

俺が死んだとしてもお前には関係はないだろう？」  
だめだ。

もう我慢ができない。

悔しいからこれだけは言いたくなかったのに。

「友達が死んで悲しくならないわけないでしょ！」

涙がこぼれる。

悔しいからこいつの前なんかで泣きたくなかったのに、次から次へと涙がこぼれて止まらない。

「友達……か」

「あーもう、くそつ、男に泣かせられた。

ほんと悔しい」

初めて男に泣かせられた。

しかも、よりもよってこんな最低で優しいアホにである。

友達って言葉をうれしそうに呟く理由もよくわからんし、ほんとなんでこんなのが私の友達なんだ。

「友達だと言ってくれたのは有達が初めてだ。

そうか、俺たちは友達だったのか」

何だこいつ、不思議ちゃんかよ。

それなりに長い付き合いなのに、ここにきて果彌とは別ベクトルでポンコツ疑惑が浮上してきた。

「それは嘘でしょ……果彌から言われたことはなかったの？」

今は恋人関係だろうが、昔は友達だったんじゃないのか。

「ないな」

マジかよ。普通は言わなくてもわかるだろうが、生憎こいつは普通じゃないのだ。

「マジか」

「マジだ。」

だから、本当の意味での友達はお前だけだな」

やっぱり、なんかこいつちよつと嬉しそうなのは気のせいだろうか。

デフォルトで無表情だからわかりにくい。

「じゃあ、お前の唯一の友達としてのお願いをする。

絶対にもう死んでもいいなんて思わないこと」

「善処しよう」

何だこの回答と思わなくもないが、さつきまでに比べたら随分マシになっている。

これが友達パワーか。

身内判定したら距離感ガバガバになるタイプなのだろうか。

「まあ、今日のところはこれでいいか……」

絶対に意識改革をさせてやる。

心の中でそう宣言するのであった。

### EX3、在りし日の恩返し③

「テスト勉強するから友達連れてきていいかな？」

娘がそう言ってきたのは数日前のこと。

休日に連れてきたのは驚くべきことに男の子の友達だった。

我が娘ながら間違えても勉強ができるとは言えない能天気な子だったが、不思議なほど成績が上がってきた理由を尋ねたのがつい先日ことだったが、まさかいつも勉強を教えてくれていたのが男の子だとは思ってもなかった。

お父さんは年頃の娘が連れてきた男子が彼氏ではないかとソワソワとして動揺しているのが丸わかりなほどである。

「はじめまして。」

束 収護と申します。

果彌さんにはいつもお世話になっております」

初めて会話をした印象はとももしつかりとした子だというもの。

「はじめまして。果彌の母です。」

いつも娘の勉強を教えてくれてるって聞いてるけど、ご迷惑をおかけしてないかしら」

お世話になっておりますと言っていたが、それが社交辞令であるのは百も承知であり、誰に似たのかはわからないが、自由奔放でどこか抜けている娘に振り回されていないかがとても心配であった。

「いえ、迷惑をかけられたことなどありません。」

私の方こそ、本日は突然押しかけてしまい申し訳ありません。

果彌さんよりテスト勉強をしたいからと呼ばれましたが、年頃の男女が同じ部屋で二人というのが心配であれば、本日はカリキュラムと問題集をお渡しして帰らせていただきます」

目敏くこちらの動揺を察したのか、淡々と無感情に告げる言葉に目を丸くしてしまう。

娘と同年代の中学生とは思えないほどの考えとはつきりとした物言いに不思議とこの子は信用できそうだと思ってしまう。

「束くんがまた変なこと言ってる」

貴女はもうちよつと気にしなさいと言いたくなるのをぐつと堪える。

どうしてこの子はこうも能天気な育ってしまったのだろうか。

「本日はテスト前の仕上げとして特別にカリキュラムを用意しておりますのでこちらをご覧ください」

カバンの中から取り出した紙束に思わず目を剥いてしまう。

本日のカリキュラムと書いてある紙には教科ごとに細かく時間と実施範囲が割り振られ、べらりと捲った問題集の紙には様々な書き込みがされており、一目でつまづきやすい部分やわかりにくいところが理解できるように作られている。

どこからどう見ても娘のためだけに作られた自作の問題集である。

これを作るのにどれほどの労力をかけたのかを考えると眩暈がしそうになってしまう。

「これ、作るの大変じゃなかった？」

「いえ、いつも作っているものなので」

首を小さく振るその姿は嘘を言っているようには見えない。

「ねえ、果彌……もしかして毎日束くんの問題作ってきてもらってるの？」

「うん。」

束くんの作る問題すつごいわかりやすいんだよ」

すつごい分かりやすいんだよじゃないわよ。

同級生の男の子に毎日何をやらせているんだこの子は……。

どうやら娘はこれがどれほど大変なことをさせているかを全く理解していないようである。

彼は私の娘に弱みでも握られているのかしらと、悪い方へと考えが及んでしまいそうになる。

「ひとつ聞いてもいいかしら？」

どうして果彌のためにここまでしてくれるの？」

これほどのものを見てしまえば、今更色恋沙汰によるものではないことくらいはわかってしまう。

だからこそわからないのだ。

「私は果彌さんに返しきれない恩があります。

それを少しでも返したいと思っただけです」

予想外の回答すぎて何も言えない。

恩返しってなんだろう。

うちの娘は一体どんな善行を詰んだのだろうか。

お父さんも聞き耳立てるだけじゃなくて何か言っただけ欲しい。

「私、恩返しでももらえるようなことしてないって言っただけで、それでも返したいって言ってくれたから勉強教えてもらってるんだ」

我が娘ながらこの凶太さと能天気さは本当に頭が痛くなってきそうである。

両者が納得すれば良いという問題なのか、自分の中の常識のようなものが揺らぎそうにすらなる。

「本当に大丈夫？」

無理してないの？」

「していません。」

このことがあなた方にとって不都合であればおっしゃってください  
「い」

思わずそう聞き返してしまったのも無理はないだろうが、目の前の少年は揺るぎすらしない。

ここまで話して初めて彼の不思議な瞳の正体に気づく。

この子は心根がとても優しいのに、驚くほど他者の感情に対する共感が薄いのだ。

だからこそ、気遣いの言葉に対しても受け取り方が極端なものになる。

多感なこの年頃の男の子にしてはとても珍しく、歪なあり方だと思ってしまう。

「不都合なんてことはないわ。」

これからも果彌のことをよろしくね」

年頃の娘が男の子と仲良くなることに対して気にならないと言ったら嘘になってしまう。

しかし、この少年に関しては心配するようなことが起きるとはとても思えなかった。

むしろ、恩を返したいと思うほどに娘の在り方に救われたのだとしたら、それを尊重してあげたいとすら思った。

「ありがとうございます。」

次回の期末までには結果を出させていただきます」

どこかほっとしたように見えるのは気のせいだろうか。

少しばかり少年らしい反応を見て自分が随分とこの不器用な優しさを持つ少年を気に入ってしまったことに気づく。

なんとなく、能天気な娘にはこれくらいしつかりした子が近くにいるほうが良いのかもしれない。

もしかしたら、この男の子とは長い付き合いになるのかもしれないと思うのだった。

## 最終話、それで終わり

きつと俺は油断をしていたのだろう。

ここに運び込まれる前に起きた地震はただの前兆でしかなかった。  
突如大きく揺れる建物。

腰掛けていたベッドから転げ落ち、揺れで立ち上がるのもおぼつかない。

「じ、地震?！」

有達が聞こえる戸惑うように声を上げる。

部屋の外からも悲鳴が聞こえ、俺は見た。

気づけば体は動いていた。

揺れる床を蹴るように走り、有達に覆いかぶさる。

「束?! きゃあー!」

有達らしくない可愛らしい悲鳴を聞くと同時に頭部に何かが落ちてくる。

ぐらつく意識。

思考の隅でなんで俺の体は動いたのだろうと、もう過ぎてしまった  
どうでもよいことを考える。

これは死んだかな。

意識がゆっくりと闇に落ち……時が止まる。

『目的達成おめでとーございます。』

あなたが死ぬ前にお伝えさせていただきます』

気づけば、またあの時間の流れがおかしい空間にいた。

そして、聞き覚えのある無機質な声。

世界の声だ。

『きつともう喋ることはできないと思いますので”最後に”疑問には  
回答しておきましょう』

実にありがたい、至れり尽くせりだなと苦痛と朦朧とした意識が固  
定されたまま思考する。

『無自覚だとは思いますが、この少女、個体名・有達友理は本来あの教



室で死ぬはずでした。

そして、あり得ない二人目の外れた因果はさらに世界の矛盾を引き起こし、近くにいた個体名・因果彌の因果と結合してこの少女に宿りました』

それなら、果彌はもう……。

『おめでとうございいます。』

あなたの守りたかった存在にはもう死の因果は存在しません。

あとはこの少女が死ねば因果の矛盾は消え、世界は正常に戻ります』

ああ、よかった……でも、なんでこんなにも喜べないんだろう。

この結果に納得できないのだろうか。

『ご納得されていないのはこれを伝えるのが遅くなったからでしょうか。』

それであれば本来あり得ないケースであるため、世界の端末でさえ把握が遅くなったというだけです』

そうじゃない。

そんなことは聞いてない。

声が出せないのが酷くもどかしい。

思考だけがまともであるのがとても気持ち悪い。

『まさかあなたがあの少女を庇うとは思わなかったらというのもありました。』  
が、人の概念で言えば、ここは謝罪をしておくべきでしょうか。

あなたへの事象報告が遅れたことによって無駄に怪我をさせてしまったことをお詫び申し上げます。』

違う。

そういうことではないのだ。

人のことを分かったふりをして”思う”などと理解してもいない概念を言葉にしているこの声にも腹が立つ。

『どうやら気に触ることを言ってしまったようですが、世界はあなたの勝利を祝っております。』

あなたの勝ちです。

そして、有達友理が死に、因果の破壊者たるあなたの死によって世界は修復されます』

どうして、有達が死んで欲しくないと思ってしまうのだろうか。  
”友達”には死んでほしくない。

こんな当たり前のことに死の間際で初めて気づいた。  
有達の言っていたことはこのことだったんだ。

ここに至ってようやく気づく己の愚かさ。

こんな思いを俺は彼女たちに味わわせてしまうのか。

だが、全てはもう遅い。

死にたくない。

初めて心の底から願った。

こんな思いをさせるため死のうとしたわけじゃない。

ようやく理解した。

俺はずっと間違えていたのだと。

『あなたの願った通り、大切な人のために死ねましたよ』

ゆっくりと流れる時間が戻る。

やっとわかった……。

俺が本当に望んでいたことはこんなことじゃなかった……。

『お疲れ様でした』

そんな無機質な声を最後に意識は闇に落ちた。

## この作品について（後書き）

完結までお読みくださり、ありがとうございました。

感想でいろいろと疑問に思われる方が多かったため、ここでこの作品について語らせていただきます。

着想はタグにもある通り、有名な名作映画シリーズであるファイナルデイスティネーションです。

ネタバレになるかもですけど、あれも主人公毎回〇にます。

そのため、この終わり方はこれを書くとき決めた時から確定していたことになります。

また、ジャンルについて曇らせがメインと考えていらっしやる方が多いですが、タグにはつけてましたけどメインとしてジャンル曇らせものというものをそもそも意識してません。

曇らせるという意味では主人公を曇らせることしか意識しておらず、徹頭徹尾主人公に感情持たせて死なせるための話でしかありません。

ヒロインは所詮舞台装置でしかないという認識です。

着想にも書きましたが、映画的な終わらせ方を意識しております。

そのため、物足りなくなる気持ちはわからないでもないとは思いますが、これは書く前から意識していることであつたので読者の方々には申し訳ないと言えません。

タイトルにもある”大切な人”というのはダブルミーニングで書いてあります。

当初は果彌しかいなかったのに、最後の最後で有達友理という友達ができてしまったからこそ、つい庇って死にました。

これでもし彼が感情を得てなければ、有達だけ死んで果彌と束は二人で生きて後悔とともに生きていたことでしょう。

だからこそ、最初の方は”彼女”という名称をつけずに描写をしておりました。

大切な人が増えるのも予定通りの展開です。

あくまでも最初と最後だけ決めて、途中はある程度ざっくりしか決  
めずに書いてなかったので急展開に感じてしまう方も多かったかも  
しれません。

これは私の描写不足もあることはご認識しております。

しかし、上にもあるように”2時間映画的な展開”を意識してるの  
もあり、このような書き方をあえてしました。

賛否両論ありなのはわかっていますが、ご了承ください。

ここであえてこのあとの話を少しさせてしまうとすると、これまた  
ファイナルディステイネーション的に有達友理は因果彌の目の前で  
残酷に死にます。

そして、親友と恋人（本人主観）を同時に失った果彌は廃人になり  
ますが、対極的に見れば生きていたので問題なしです。

感情を得る前の主人公ならば生きているから無問題と喜んだこと  
でしょう。

しかし、最後の最後で死の間際に自分が死ぬことで彼女たちがどう  
思うかということに気づいてしまった彼は深い後悔のまま死にまし  
た。

目的を達成しておきながら、その目的そのものが間違えていたとい  
うよくある話ではありません。

大体こんな感じの考えで書き切りました。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。

## 【お知らせ】改訂版連載始めました。

ハーメルンでのみ過去更新していたため、こちらには改訂版について告知いたします。

もう少しでこちらで書いた分に追いつきそうなので、遅ればせながらの告知となります。

タイトル【連載版】大切な人を庇って死ぬのが夢なのに世界がそれを許さない件

<https://syosetu.org/novel/340623/>

また、ある程度は改定前と流れが同じなため、こちらにも差を記載させていただきます。

### 【改訂版との違い】

- ・ヒロインの心理描写を必要に応じて（裏）として追加。

- ・世界の声の説明を少し親切にしました。

- ・簡単に死なないように死の因果の発生条件を明確にしました。

発生条件の明確化によって、死の因果の事故が小さい時と大きい時との差もわかるようになっています。

- ・作中で因果の考察と、掘り下げをしています。

- ・どんなに反射神経がよかろうと流星に人間の範疇だとすぐ死んでしまうのでテコ入れ予定。

- ・世界の声が定期的に謎のポイントを加算。

詳細は今後の作中にて語ります。

- ・世界の声が無機質な印象から、愉悦を感じるような、ゲームマスターのように見下ろすようにも感じるようにも感じられるようになっています。

- ・その他、この短期連載版ではなかった描写、キャラの掘り下げも予定しております。

例えば、主人公の自己評価の低さや、歪な精神性についてはちゃんと書いていきます。

・個人的に、ヒロインである果彌の友達については実はもっとちゃん設定が定まっていたのに全然書けなかったのが気になっておりました。

もっとしつかり書いておけばよかったなと思った点ではありますので、そちらについてはちゃんと描写していく予定です。

・あと、クズ親エピソードをもっと書いておけばよかったと思った点を書き直しを決心した大きな要素なので違和感ない程度に回想入れさせていただきます

### 【反省点】

皆様からの感想、ご指摘をいただいた点を参考にさせていただいております。

描写不足、展開の早さと無理矢理な部分を可能な限りなくす予定です。

あらためて、感想ありがとうございました。  
連載版の方も感想をいただければ幸いです。

以上、よろしく願います。

### 【あとがきのなもの】

個人的に迷っているのがヒロインを増やしてもいいのかという点。

あくまでも主人公の優先順位は果彌というのは変わらないのですが、他人の彼氏（スパダリ）羨ましいなという、よくある女子的心理を書くのもありかなと思ったり・・・

すぐに死なせるつもりはないので話の展開的に果彌の目のハイライト消してみたい感もあつたりします。

NTRやんけー！

といかないまでも、ジャンル恋愛をうたってる以上はもうちよいテコ入れしたいなと思ってます。（これは未定ですが）